八雲村文化財調査報告　24

復旧治山事業(秋家)予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

寺谷五輪塔群

平成17(2005)年3月

島根県八雲村教育委員会

復旧治山事業(秋家)予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書

寺谷五輪塔群
てら たに ご りん とう ぐん

平成17(2005)年3月

島根県八雲村教育委員会

序

八雲村教育委員会では、島根県松江農林振興センター(林業部治山・林道グループ)の委託を受けて、平成16年度に復旧治山事業(秋家)に伴う寺谷五輪塔群の発掘調査を実施しました。本報告書はこの遺跡の調査成果をとりまとめたものです。

今回の調査では、桑並川左岸の丘陵斜面から多数の五輪塔と陶磁器や鉄製品などが発見されました。

この報告書が地域の歴史を解明するうえでの糸口になることを期待すると共に、郷土の歴史と文化に対する理解と関心を高める一助としてお役に立てば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたりまして、ご協力いただきました島根県松江農林振興センター、島根県教育庁文化財課、並びに土地所有者の方々、また、直接発掘調査に携わっていただきました作業員の皆様に衷心より感謝の意を表します。

平成17年3月

八雲村教育委員会

教育長　泉　　和　夫

例　　言

1．本書は、島根県松江農林振興センター(林業部治山・林道グループ)の委託を受けて、八雲村教育委員会が平成16(2004)年度に実施した復旧治山事業(秋家)に伴う寺谷五輪塔群の調査成果を取りまとめたものである。

2．本書で扱う遺跡の所在地及び調査面積等は次のとおりである。

遺跡所在地　　島根県八束郡八雲村大字西岩坂4477番地、3176番地
土地所有者　　[西岩坂4477番地]　八雲村大字西岩坂2323番地　石倉敏明
　　[西岩坂3176番地]　八雲村大字西岩坂2354番地　石倉眞也
試掘調査面積　21.5㎡
追加調査面積　　7㎡

3．調査組織は以下のとおりである。

調査主体　　八雲村教育委員会　　教育長　泉　和夫
事務局　　三好　淳(教育次長)、藤田節子(嘱託)
調査指導者　　中村唯史(島根県立三瓶自然館サヒメル学芸員)
　　原田敏照(島根県教育庁文化財課文化財保護主事)
調査担当者　　川上昭一(社会教育係主任主事)
調査補助員　　田中和美(臨時職員)、深津光子(臨時職員)
作業員　　石川範子、石倉フサ枝、宇田昭治、宇津実、高尾万里子、真野凱睦、山下征雄
遺物整理　　高尾万里子

4．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。(順不同、敬称略)
今岡稔(島根県文化財保護指導委員)、西尾克己(島根県教育庁文化財課)、石倉巌(地元住民)
石倉とせ子(同)

5．本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。

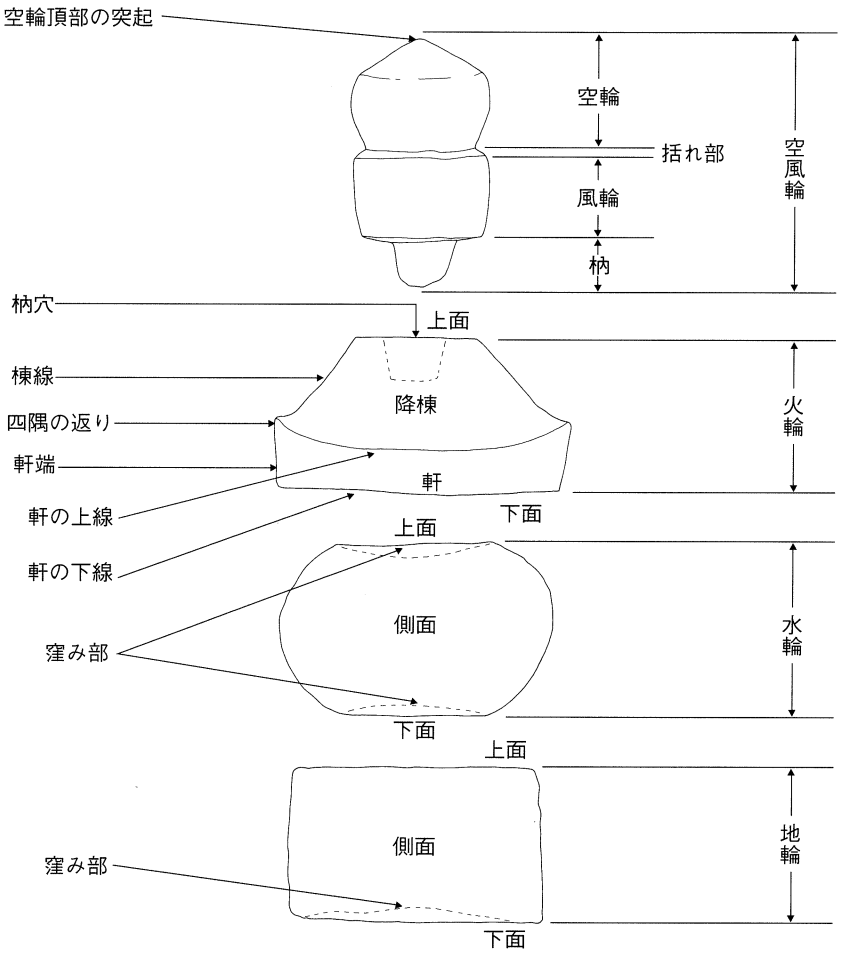
6．本書で使用した方位は磁北を示す。

7．本書に掲載した「第1図：寺谷五輪塔群の位置と周辺の遺跡(1：25,000)」は八雲村管内図を使用し、「第2図：寺谷五輪塔群試掘トレンチ配置図(1：500)」は島根県松江農林振興センターの工事図面を浄書して使用した。

8．「第１図：寺谷五輪塔群の位置と周辺の遺跡（１：25,000)」の遺跡番号は島根県教育委員会発行の『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ』（出雲・隠岐編）2003年３月と対応している。

9．本遺跡出土遺物及び調査記録は八雲村教育委員会で保管している。

10．本書で使用した五輪塔の各部の呼称は次の通りである。(間野大丞「中世石造物の調査方法について」『来待ストーン研究』１　来待ストーンミュージアム1998年の五輪塔各部の名称を一部改変して使用した。)



11．本文中の五輪塔実測図の網目部分は欠損を示す。

本　文　目　次

第1章　位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2章　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第3章　調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第4章　遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

1．工事立会調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

2．試掘調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

3．近代墓の周辺に集積された五輪塔群 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

4．不時発見による五輪塔群の追加調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

第5章　ま　と　め ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

第6章　自然科学的分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

第１章　位置と環境

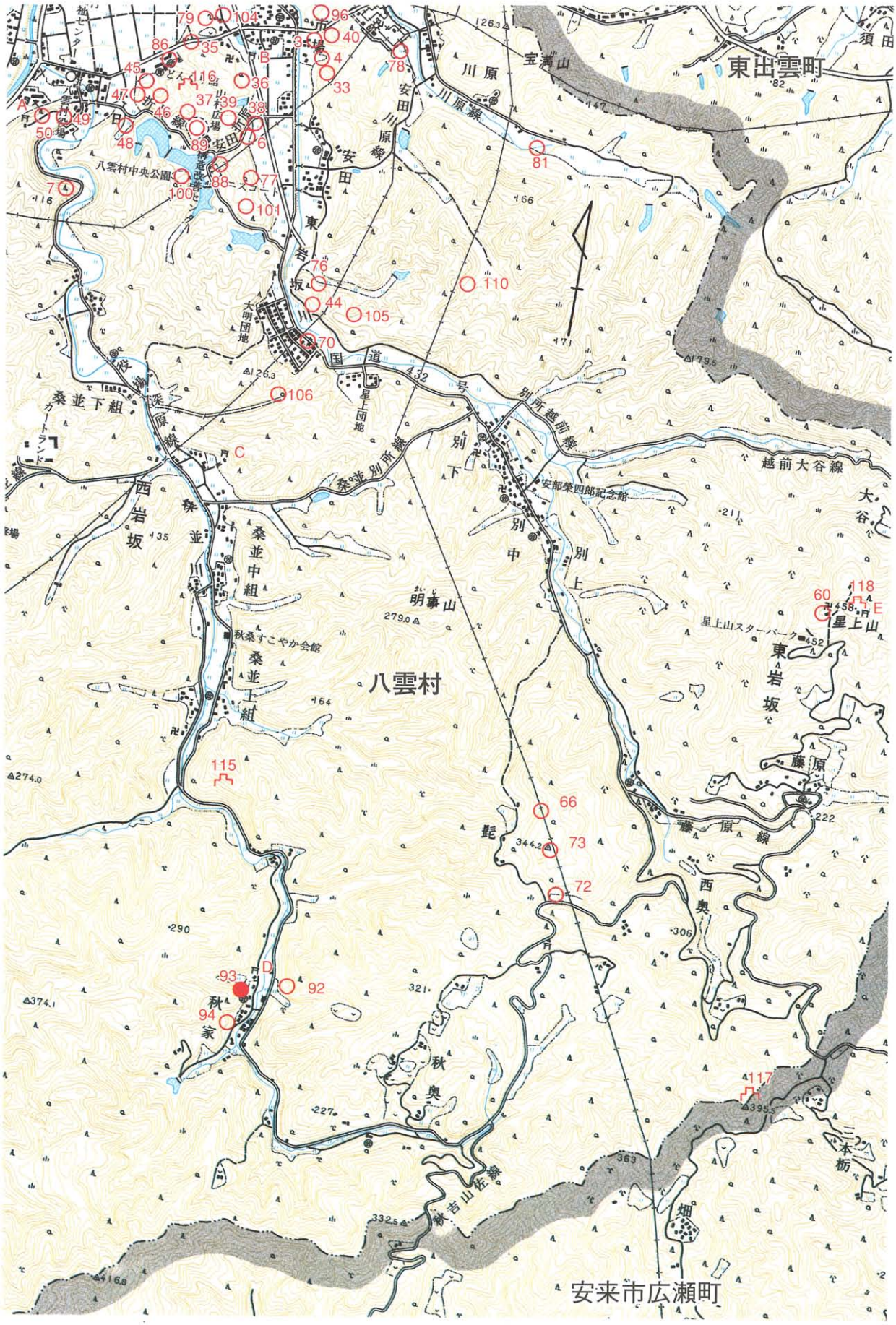
八雲村は松江市の南郊、北緯35度･東経133度に位置し、北と西は松江市、南西部は雲南市大東町、南東部は安来市広瀬町、北東部は八束郡東出雲町に囲まれている。村の規模は東西８㎞・南北10㎞・面積約55.41㎢で、総面積の80％以上が山林で占められている。村の中央を意宇川が北流して中海に注いでおり、これに流れ込む数本の小河川が合流する村の北側（意宇川の中流域）に平野が展開している。遺跡はこの川と平野を取り囲む地域に多くみられ、下流域に向かうほど密集する。また、これまで実施した調査では古墳時代のものが顕著である。

さて、今回調査を行った寺谷五輪塔群（島根県遺跡番号F93）のある秋吉家村地区は、意宇川の支流の１つである桑並川の上流部に位置しており、意宇川との合流地点から計測すると約5.6㎞ほど奥地へ入った場所にある。この付近の谷幅は50～80ｍほどしかなく、谷壁は急峻で谷底の平地は極めて少ない。この谷底の平地には余すところなく水田が営まれており、民家は急峻な谷壁に沿うように建てられている。谷壁の斜面には段々畑が造成され、山頂付近まで続く。また、所々に炭窯跡が散在しており、斜面を加工段状に造成して小さな平坦部を作り、各家単位で造営された墓地も見受けられる。この他、狭い小支谷は深部まで水田、畑地として利用されている状況である。

寺谷五輪塔群は、このような秋吉家村地区の谷壁の斜面に位置しており、五輪塔は東へ向かって突き出した丘陵斜面に散在的に分布している。このうち、丘陵南斜面の段々畑と東斜面の墓地周辺（今回の調査地）に集積されたものが有名である。丘陵南斜面の段々畑周辺の小字名は「寺谷」と呼ばれており、寺の所有地であったとか、実際ここに寺が存在していたという伝承も残っている。

周辺の遺跡としては、ジャノ廻五輪塔群（F92）や火事廻五輪塔群（F94）といった五輪塔群が存在する。ジャノ廻五輪塔群は寺谷五輪塔群の対岸に位置しており、100個の五輪塔の部材が集積されている。平成15（2003）年、八雲村産業課により五輪塔を安置する基壇とそこへアクセスするための遊歩道の整備が行われており、この時に工事立会調査を実施している。集積された五輪塔周辺からは墓壙や新たな五輪塔、遺物は検出されなかった。火事廻五輪塔群は近接する丘陵斜面に位置し、確認できるだけで18個の五輪塔の部材が野積みにされている。寺谷五輪塔群もそうであるが、これら秋吉家村の五輪塔群は、昭和48年に付近に露出していたものや開墾などで出土したものを八雲村文化財保護協会員の手により、現在の場所に集められたものである。出土地点を特定できるものはないが、聞くところによると畑地造成や植林、道路造成など丘陵斜面の掘削時に発見されたものが多いようである。五輪塔群以外の遺跡として桑並城跡（F115）や畑要害城跡（F117）といった中世の山城が山頂部に造られているが、桑並川上流部において古代の遺跡は確認されていない。それでも遺跡の隣接地には『出雲国風土記』に登場する田村神社（第１図Ｄ）が存在しており、当時から集落が形成され祭祀が行われていたことを物語っている。この田村神社は『出雲国風土記考』や『出雲神社巡拝記』によると『雲陽誌』の金田明神に比定されている。近世においては金田明神、すなわち金山毘古を祀る社として信仰されていたこととなり、近世に開かれたと伝えられている岩坂銀山との関係が注目される。

桑並川上流地域は地理的にみると尼子氏の居城月山富田城のあった安来市広瀬町と接し、中海・宍道湖が近いという地理的条件から、中世特に戦国時代の伝承が数多く残っており、今後中世の遺跡の増加と重要な遺構の発見も予想される地域である。



第１図　寺谷五輪塔群の位置と周辺の遺跡（１：25,000）

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	名　　称	種　別	概　　要
3	四歩市横穴墓群	横穴墓群	28穴確認、須恵器
4	高丸横穴墓群	横穴墓群	４穴確認
6	安田横穴墓群	横穴墓群	２穴、平天井型
7	岩屋口横穴墓群	横穴墓群	８穴（２穴消滅、１穴調査）
33	高丸古墳群	古 墳 群	円墳２基
35	中山古墳群	古 墳 群	方墳５基、２号墳発掘調査・消滅
36	谷ノ奥遺跡	古 墳 ・ 古 墓 群	方墳３基、円墳？１基、火葬墓、一部調査
37	北折原遺跡	古 墳 他	方墳１基、横穴２穴、一部調査・消滅
38	安田古墳群	古 墳 群	円墳２基、１号調査・消滅
39	外輪谷横穴墓群	横穴墓群	13穴、12号調査・消滅・鉄鎌他
40	四歩市古墳群	古 墳 群	方墳６基
44	細田横穴墓群	横穴墓群	平入家形
45	禅定寺横穴墓群	横穴墓群	６穴、方形丸天井型
46	禅定寺古墳群	古 墳 群	方墳10基
47	折原横穴墓群	横穴墓群	３穴
48	折原下堤遺跡	散 布 地	土師器、須恵器
49	大日堂横穴墓群	横穴墓群	４穴確認、丸天井型、須恵器
50	岩坂神社横穴墓群	横穴墓群	須恵器
60	星上山五輪塔群	古　　墓	五輪塔
66	小深原遺跡	散 布 地	縄文土器・黒曜石石鏃、一部発掘調査・消滅
70	鈩谷遺跡	散 布 地	消滅、現在の大明団地
72	大佐平遺跡	散 布 地	黒曜石石鏃
73	西ノ谷遺跡	散 布 地	縄文土器・黒曜石剝片他、一部発掘調査・消滅
76	細田古墳群	古 墳 群	方墳２基確認
77	松ノ前古墳	古　　墳	方墳
78	浜井場遺跡	散 布 地	土師器、須恵器
79	中山五輪塔群	古　　墓	五輪塔、石塔は原位置移動
81	屋敷谷五輪塔群	古　　墓	五輪塔
86	禅定寺遺跡	住 居 跡	掘立柱建物跡、陶磁器、石帯他。一部発掘調査・消滅
88	折原上堤東遺跡	住 居 跡	一部調査・消滅、竪穴住居、掘立柱建物跡
89	折原中堤北遺跡	散 布 地	須恵器
92	ジャノ廻五輪塔群	古　　墓	五輪塔、石塔の大部分は原位置移動
93	寺谷五輪塔群	古　　墓	五輪塔、石塔の大部分は原位置移動
94	火事廻五輪塔群	古　　墓	五輪塔、石塔の大部分は原位置移動
96	増福寺横穴墓群	横穴墓群	２穴確認、法面に玄室の一部が残存
100	折原中堤遺跡	住 居 跡	一部調査・消滅、竪穴住居跡、土師器
101	折原峠遺跡	住 居 跡	一部調査・消滅、加工段、弥生土器
104	中山遺跡	散 布 地	須恵器、土馬
105	宮谷遺跡	集 落 跡	調査・消滅、製炭跡
106	真ノ谷遺跡	集 落 跡	調査・消滅、加工段、落とし穴
110	鑓溝遺跡	散 布 地	一部調査・消滅、須恵器、磨製石斧
115	桑並城跡	城　　跡	
116	禅定寺城跡	城　　跡	郭、土塁、堀切、連続竪堀
117	畑要害山城跡	城　　跡	郭、帯郭
118	星上山城跡	城　　跡	郭？、堀切？、明確な遺構なし
A	磐坂神社		
B	毛社神社		
C	志多備神社		
D	田村神社		
E	那富乃夜神社		

第2章　調査に至る経緯

治山事業は、森林の維持造成を通じて山地に起因する災害から国民の生命･財産を保全し、また、水源のかん養、生活環境の保全・形成等を図る極めて重要な国土保全政策の一つであり、安全で安心できる豊かなくらしの実現を図るうえで必要不可欠な事業である。この中の復旧治山事業とは、山腹崩壊地・禿げ山・浸食されたり異常な堆積をしている渓流などの荒廃山地を復旧整備し、災害の防止、軽減を図るためのものである。

さて、今回の事業予定地である西岩坂の秋家地区は、平地が少ないために急峻な山の斜面に接して民家が建てられている。これらの山の斜面は岩石が非常に脆く、過去の豪雨や地震の際に何度か土砂崩れが起きている。また、平素においても度々落石が確認されるなど、安全面に問題があることが以前より指摘されており、落石・土砂崩れの防止など安全対策が長年の課題となっていた。このため､松江農林振興センターでは崩落の続く秋家地区の山を安定させるため､復旧治山事業によって災害の防止、軽減を図ることとした。

今回の工事は、杭打ち工・ボーリング暗渠工・土留め枠工という3つの工法を複合的に実施するものである(第2図参照)。杭打ち工とは、直径21㎝、長さ10～16ｍを測る鋼管杭を2ｍ間隔に垂直に打ち込み、山の地滑りを防止するためのものである。今回は山のコンターに沿うように31本の鋼管杭が打ち込まれている。ボーリング暗渠工とは、山の水平方向に直径9㎝、長さ10～16ｍの横穴を掘り、ここに小孔の空いた直径4㎝の塩化ビニール管を埋め込んで地滑りの一番の原因となる水を抜く暗渠排水溝を設置するものである。土留め枠工とは、垂直に近く立ち上がっている民家の裏山の斜面を削って勾配を緩やかにし、ここに井桁ブロックを設置して山の崩壊を防ぎ、併せて斜面を安定させるためのものである。

この事業に先立ち、松江農林振興センターより八雲村教育委員会宛に事業予定地内における埋蔵文化財有無についての照会があった。事業計画地内の丘陵は寺谷五輪塔群として周知されており、丘陵の2カ所に五輪塔が集積されていることが知られていた。平成15年12月24日に対象地の分布調査を実施したところ、近代の墓の横に野積みになっている多数の五輪塔を確認した。このため遺跡保護の協議がなされたが、復旧治山という緊急を要する事業であり、場所の変更や工法の変更など不可能との結論に達し、八雲村教育委員会が主体となり調査を行うこととなった。調査は、これらの五輪塔群がどこから運ばれてきたものか判らなかったため、ひとまず遺跡の範囲を確認するための試掘調査を平成16年度事業として実施することとなった。

この後、平成16年1月13日に松江農林振興センターより、事業の緊急性から杭打ち工・ボーリング暗渠工部分については平成15年度事業として年度内に工事を実施したいという申し入れがあった。八雲村教育委員会では工事内容を検討し、島根県教育委員会文化財課と協議した結果、これら2つの工事については工事区域が非常に狭小なため調査を実施することが不可能なことと、復旧治山という緊急を要する事業であったため、工事に着手されても問題はないとの結論に達し、その旨を松江農林振興センターに回答した。但し、杭打ち工については鋼管杭を運ぶ運搬用のレールとそれを打ち込む作業台の設置作業が必要であり、一部地山の掘削を伴うことから工事立会調査を実施している。

第3章　調査の経過

平成15年度は、鋼管杭運搬用のレールと鋼管杭を打ち込む作業台の設置作業に伴う工事立会を実施している。これらの工事では重機を使った掘削は行われず、地山に対する掘削は手作業により表土層を浅く削る程度であった。それにも関わらず、工事区域内からは五輪塔の火輪、鉄製品、陶磁器など多数の遺物を採取することができた(詳細は「1．工事立会調査の概要」に記載)。

平成16年度は、本調査に先だって遺跡の範囲を確認する意味での試掘調査を実施している(詳細は「2．試掘調査の概要」に記載)。調査地は、復旧治山事業(秋家)の工事区域のうち、土留め枠工の実施予定地である八雲村大字西岩坂4477番地・3176番地を対象区域とした。4月13日に島根県松江農林振興センターと協定を結び、同年4月26日に委託契約を締結し、5月11日に文化財保護法第58条の2第1項に基づく通知を島根県教育委員会宛に提出している。調査はまず、急斜面の平坦部にトレンチを設定することから始めた。当初、2×5mトレンチ3本を予定していたが、地形の制約により2×2mトレンチ2本、4×1.5mトレンチ1本、5×1.5mトレンチ1本の合計4本を調査することとした。斜面の下には民家が存在していたため、トレンチの周囲に合板で泥止めを設置してから掘削作業に取りかかった。トレンチ内の土砂は拳大の角礫流紋岩を多く含んだ礫層であったことから掘削は困難を極め、深層は鶴嘴を使いながらの作業であった。随時、遺構の精査、写真撮影を行い、5月13日に調査指導会を開催し、5月14日に全体写真の撮影とトレンチ配置図を作成して調査を終了した。この後、5月24日には工事予定地内にある墓の移転が行われた。これに併せて、墓の横に野積みになっていた五輪塔の供養も行い、同日午後に五輪塔を持ち帰っている(五輪塔群の詳細は「3．近代墓の周辺に集積された五輪塔群」に記載)。

さて、土留め枠工の掘削工事は平成16年8月9日より開始されている。試掘調査時に地表面に近い位置から地輪が出土していることから、念のため工事立会を実施している。翌10日の午前には表層に近い位置より五輪塔が散在的に出土し、掘削が進んだ昼前になると深層より多数の五輪塔の部材がまとまって発見される事態となった。急遽、工事を中断していただき、同日午後に島根県文化財課、島根県農林振興センターとの三者で協議を行った。その結果、工事を一時中断し、五輪塔が集中的に出土している地点の本調査を実施することとなった(調査の詳細は「4．不時発見による五輪塔群の追加調査」に記載)。8月10日付で文化財保護法第58条の2第1項に基づく通知を改めて県教育委員会宛に提出し、8月11日より調査に取りかかった。随時五輪塔の取上作業と遺構の精査を行い8月19日に全体写真を撮影して現地での作業を終了した。

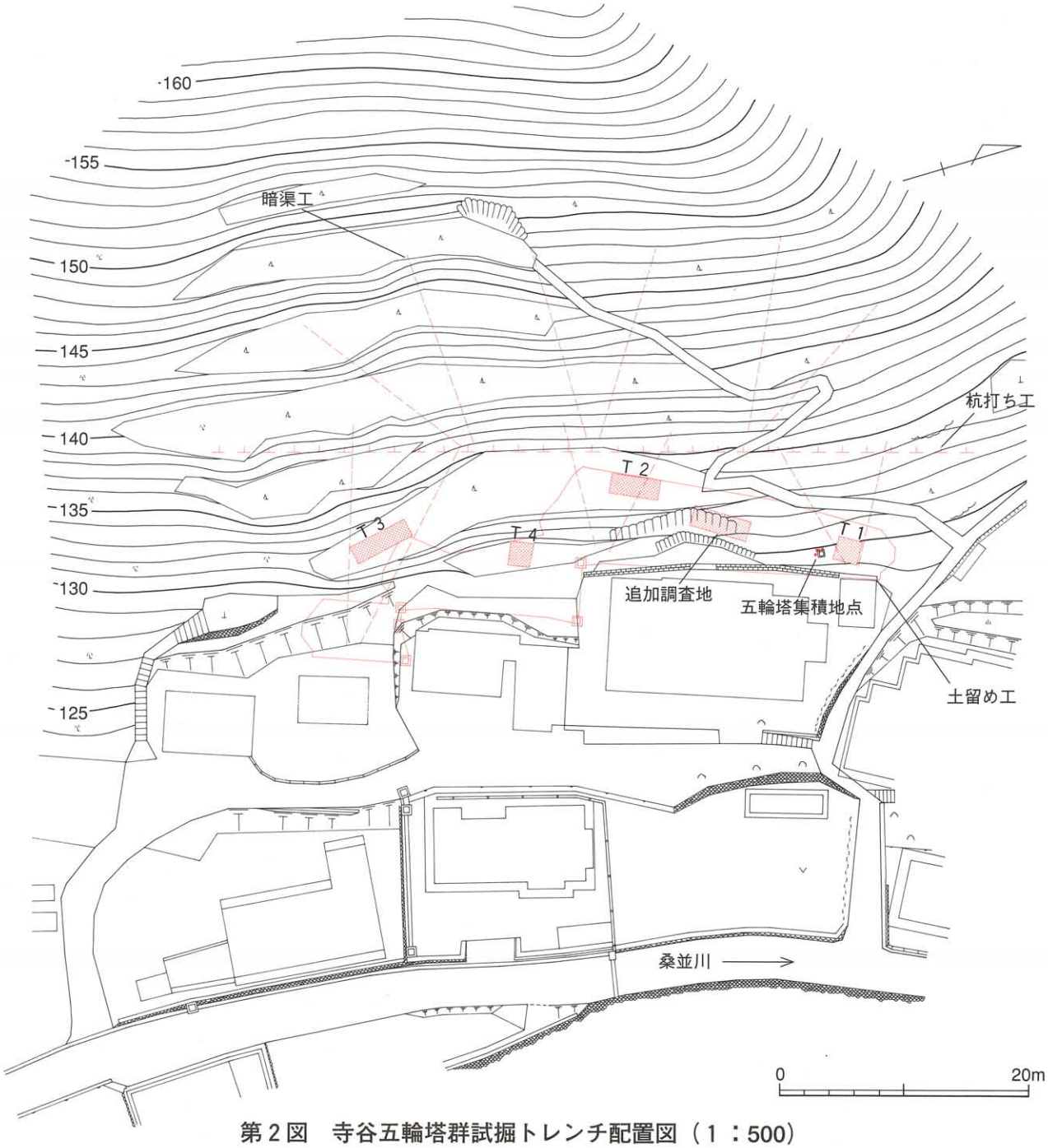
五輪塔の供養風景

五輪塔の不時発見直後の状況

第４章　遺跡の概要

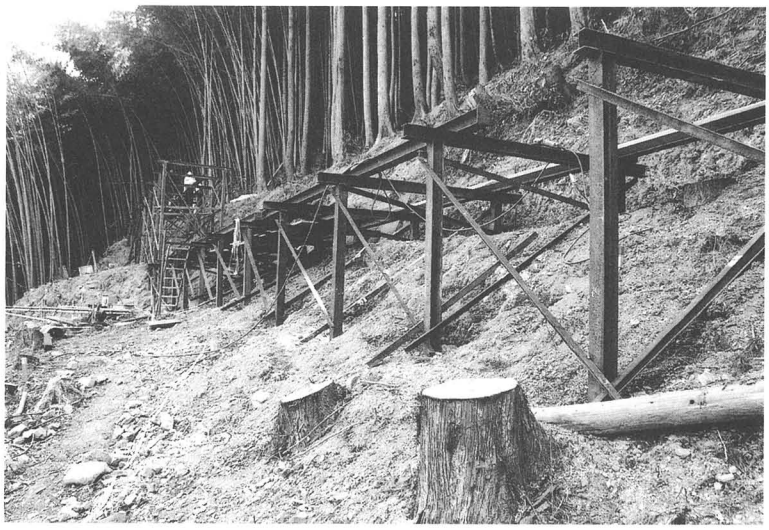
調査地は、八雲村大字西岩坂4477番地・3176番地であり、小字名を堂ノ脇・家ノ上という。桑並川左岸の丘陵斜面に位置しており、調査地での標高は129.00 ～ 135.00 mを測る。この斜面は山頂付近まで段々畑が造成されており、近年は梨畑、炭焼きなどに利用されていた。斜面の裾は垂直に近く削られ平坦部が作り出されており、平坦部には法面と接するように民家が建てられている。寺谷五輪塔群はこの丘陵斜面に位置する五輪塔群である。

以下、調査の経過に沿って平成15年度に実施した工事立会調査で出土した遺物、平成16年度に実施した範囲確認調査の概要、近代墓の横に集められていた五輪塔の概要、遺跡の取り扱いが終了した後に不時発見された五輪塔群の４つに分け概略を記す。



第２図　寺谷五輪塔群試掘トレンチ配置図（１：500）

1．工事立会調査の概要



工事立会調査時（運搬用レール付近）近景

ここでは、平成15年度に実施した工事立会調査時に採取された遺物を取り扱う。立会調査の対象としたのは復旧治山事業（秋家）のうち、杭打ち工の実施予定地である。そもそも杭打ち工それ自体は1つ1つの工事区域が非常に狭小なため、調査を実施することが不可能であった。しかし、この工事に使用する鋼管杭を運ぶ運搬用のレールと鋼管杭を打ち込むための作業台の設置作業が必要であり、一部地山の掘削を伴うことから工事立会を実施することとなった。これら杭打ち工を実施するための事前準備には重機を使った掘削は行われず、地山に対する掘削は手作業により表土層を浅く削る程度であった。また、面積的にもレールの脚や作業台となるH鋼を設置する50㎝×50㎝の範囲を2m間隔で掘削するものであった。それにも関わらず、五輪塔の火輪、鉄製品、陶磁器など多数の遺物が採取されている。面積から単純に考えれば、杭打ち工実施予定地周辺には多数の遺物が埋蔵されているものと思われる。この杭打ち工実施予定地は、範囲確認調査の対象とした土留め工実施予定地よりも1～6mほど高い斜面上にある。

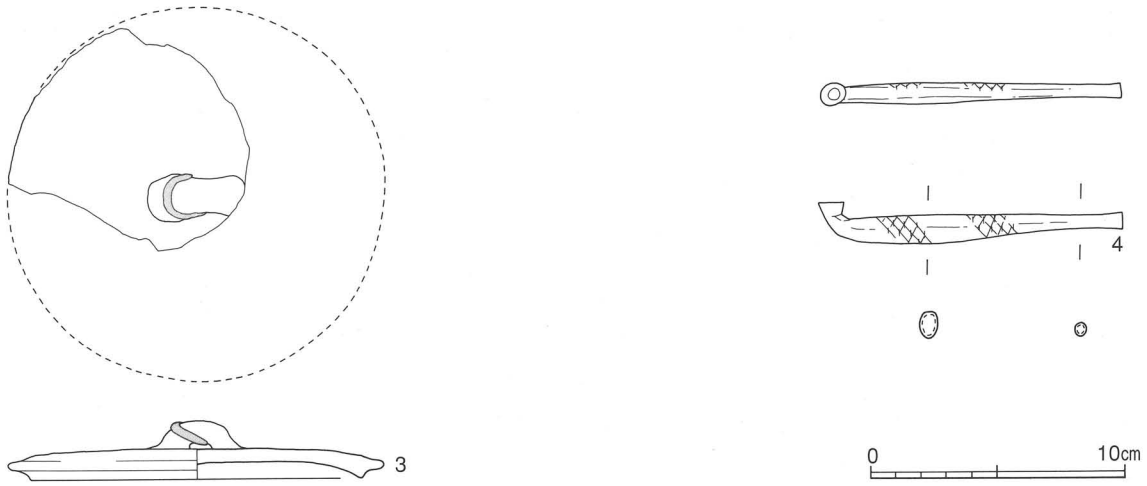
①陶磁器（第3図1・2）

1は肥前系磁器皿の破片である。蛇の目高台をもち、復元底径6.6㎝を測る。内面の文様は底部と体部の境が圏線、体部内面には草花文が施されている。また、見込み部分にも文様が描かれているが、小片のため不明である。外面の文様は体部が唐草文、高台と体部の境に圏線が施されている。口径10.0㎝、器高2.0㎝を測る。時期は19世紀前半までのものである。2は肥前系磁器の徳利である。「ハ」の字に開く低い高台をもち、体部はやや内湾気味に立ち上がっている。文様は外面の体部下半と高台と体部の境界付近に圏線が施されている。底径3.8㎝を測る。時期は19世紀後半の幕末から明治にかけてのものと考えられる。これらの遺物は五輪塔群の時期とは直接関係ないものと考えられる。

第3図　工事立会時出土陶磁器実測図（S=1/3）

②金属製品（第４図３・４）

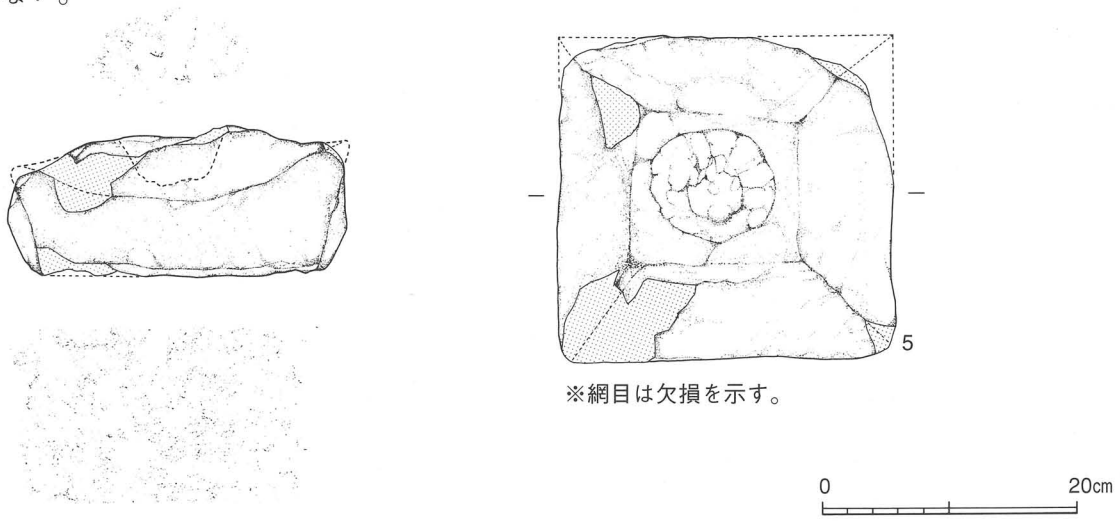
３は茶釜の蓋と考えられる鉄製品であり、中央に向け徐々に器高が高くなる盛蓋[註1]タイプのものである。天井部外面の座にあたる位置が環付状になっており、直径1.8㎝を測るリング状の摘みをもつ。法量は口径13.0㎝、器高2.4㎝、最大径14.8㎝、重量169.4ｇを測る。磁石にしっかりと付着するものである。４は煙管である。火皿・管(羅宇)・吸口の総てが金属で作られている延べキセル[註2]と呼ばれるタイプである。側面には網目状の文様が毛彫りされているのが観察できる。錆のため判然としないが、この文様は螺旋状に施されているようである。火皿部と吸口部は正円ではなく楕円形に近い。火皿の外径0.9×1.0㎝、吸口の外径0.6×0.7㎝を測る。全長は12.0㎝、重量は11.4ｇである。材質は全面が薄緑色の錆で覆われており、銅か真鍮と思われる。磁石には付着しない。



第４図　工事立会時出土鉄製品実測図（S=1/3）

③五輪塔火輪（第５図５）

５は砂岩製の火輪である。軒の上線と下線が中央部では平行であるが、端になると上線だけが反り返り降棟に続く。上面幅11.0×13.5㎝・軒幅25.5×26.2㎝・高さ12.0㎝・重量9.60㎏を測る。軒幅に対する高さの割合は、幅：高さ＝10：4.5のやや高さの低いものである。上部に穿たれた柄穴は楕円形を呈し、上縁部長軸8.0㎝、短軸7.5㎝、深さ最大4.7㎝を測る。Ｔ２トレンチから出土した地輪(第８図７)と近い場所から採取されており、同じ砂岩製であることからもセット関係にあるものかもしれない。



第５図　工事立会時出土五輪塔火輪実測図（S=1/6）

2．試掘調査の概要

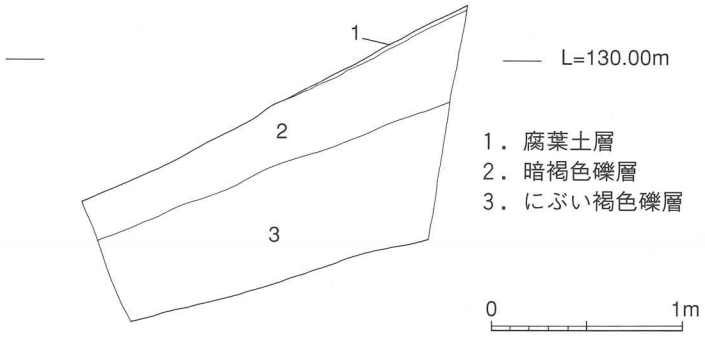
調査地は、復旧治山事業（秋家）のうち土留め枠工の実施予定地を対象区域とした。寺谷五輪塔群は東へ向かって突き出した丘陵斜面に位置しており、石材は丘陵南斜面の段々畑の隣接地と丘陵東斜面の墓地周辺（今回の調査地）の２カ所に集積されている。これらの石塔群は、付近の斜面から出土したものを集めたと伝えられているが、何処から出土したものなのか原位置を確認できるものはない。このため、ひとまず遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施することとした。秋家集落の墓地は、山の斜面を断面「L」字状にカットして造成した平坦面に造営されているものが多く、集落を一望できるやや小高い場所に位置している。このため試掘トレンチも平坦部に設定した。当初、２×５ｍトレンチ３本を予定していたが、地形の制約により２×２ｍトレンチ２本、4×1.5ｍトレンチ１本、5×1.5ｍトレンチ１本の合計４本を調査することとなった。調査の結果、墓壙などの遺構は検出されず、試掘調査をもち現地での調査を終了している。

斜面をカットして造成された秋家地区の墓地

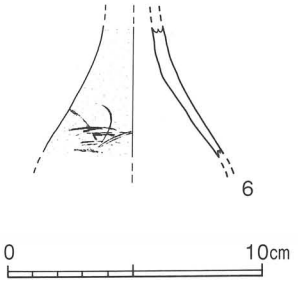
①Ｔ１トレンチ（第６図）

五輪塔が集積されている近代墓の西側に設定した２×２ｍのトレンチであり、設定面での標高は129.0～131.0ｍを測る。腐葉土層を取り除き、暗褐色礫層を25～50㎝掘り下げたところで、にぶい褐色礫層を検出した。ここで一旦精査を試みたが遺構は検出されなかった。サブトレンチにより更に32～73㎝掘り下げてみたが、土層に変化はみられなかった。遺物は第２層の暗褐色土層より江戸時代後期の肥前系磁器皿と徳利、明治以降の磁器茶碗が出土した。

Ｔ１トレンチ出土遺物（第７図６）　６は肥前系磁器徳利の体部から頸部にかけての破片である。内面は無釉、外面には植物が描かれ、透明釉が施されている。胎土は精選された緻密な磁器土で焼成は良好である。色調は内面がにぶい赤褐色、外面は灰色である。



第６図　Ｔ１トレンチ土層断面実測図（S=1/40）

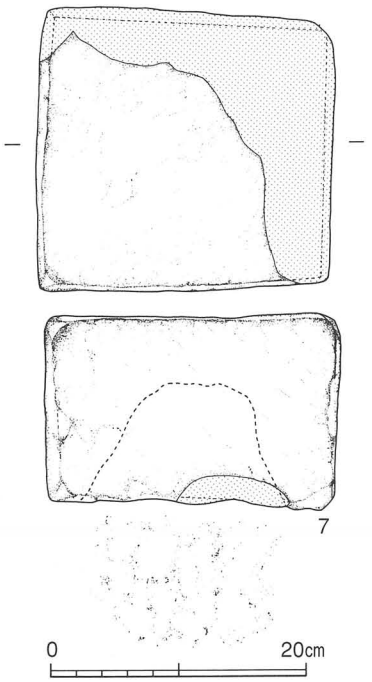


第７図　Ｔ１トレンチ出土陶磁器実測図（S=1/3）

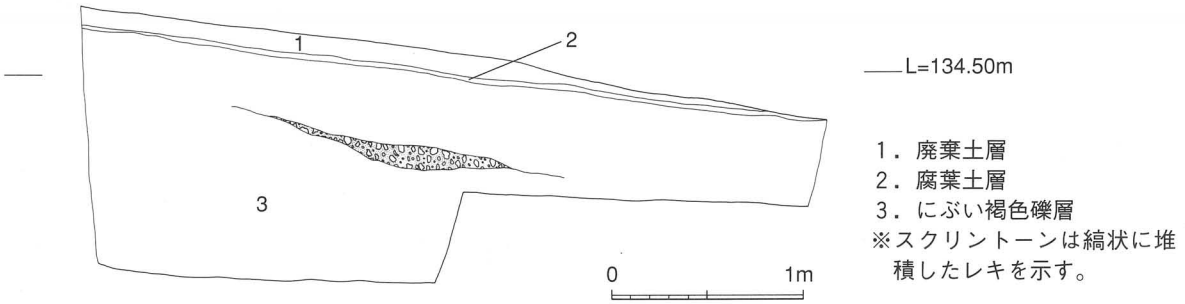
②Ｔ２トレンチ（第９図）

加工段の平坦部に設定した４×1.5ｍのトレンチであり、設定面での標高は134.0～135.0ｍを測る。この平坦部は昭和20年代までは梨畑として利用されていたようであるが、いつ頃造成されたものかは不明である。腐葉土層を取り除き、第３層のにぶい褐色礫層を48～94㎝掘削している。サブトレンチを設定して更に38～50㎝掘り下げているが、土層に変化はみられなかった。第３層は崩壊土層であり、礫が縞状に堆積している部分が観察できる。このことから、この層は何回かに分けて崩落したものと考えられる。遺物としては第３層上層から砂岩製の地輪１点が出土している。この面で遺構の精査を試みたが墓壙等は検出されなかった。恐らく土砂の崩落に伴い上部より流れ込んだものと思われる。

Ｔ２トレンチ出土遺物（第８図７）　７は砂岩製の地輪である。上面幅は22.7×23.0㎝、下面幅は21.5×21.5㎝であり、下面よりも上面の方が幅広に作られている。底部は平面が方形に刳り込まれている。高さ15.7㎝、重量11.15㎏を測る。幅に対する高さの割合は幅：高さ＝10：6.8である。鋼管杭を運ぶ運搬用のレールと作業台の設置に伴う工事立会時にこのトレンチの近くから砂岩製の火輪（第５図５）が採取されている。この地輪とセット関係にあるものかもしれない。



第８図　Ｔ２トレンチ出土五輪塔地輪実測図（S=1/6）

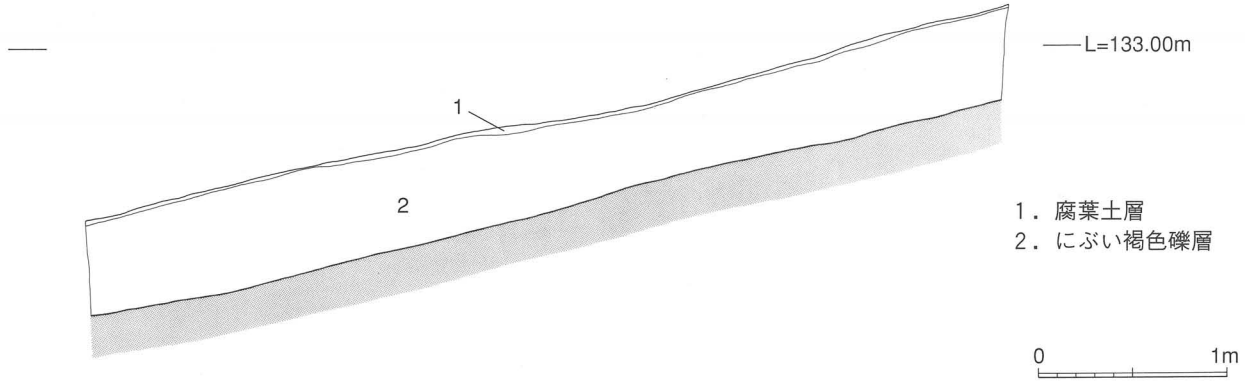


第９図　Ｔ２トレンチ土層断面実測図（S=1/40）

Ｔ２トレンチ地輪出土状況

③Ｔ３トレンチ（第10図）

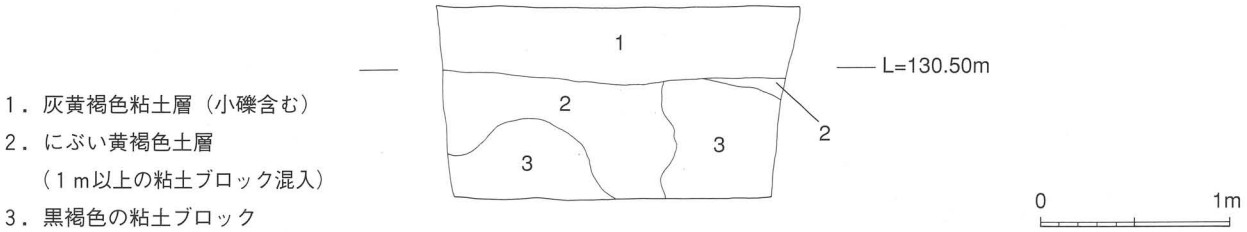
加工段の平坦部に設定した５×1.5mのトレンチであり、設定面での標高は132.00～133.50mを測る。この平坦部は昭和20年代までは梨畑として利用されていたものであるが、いつ頃造成されたのかは不明である。腐葉土層を取り除き、にぶい褐色礫層を45～55cm掘削したところで黄褐色の地山を確認した。遺物、遺構は検出されていない。



第10図　Ｔ３トレンチ土層断面実測図（S=1/40）

④Ｔ４トレンチ（第11図）

加工段状の平坦部に設定した２×２mのトレンチであり、設定面での標高は130.0～131.0mを測る。この平坦部は近年まで畑地として利用されていた場所である。第１層の灰黄褐色粘土層を34～40cm掘り下げるとにぶい黄褐色の粘土層が現れた。このにぶい黄褐色土層中には１m以上の粘土ブロックが混入しており、斜面の崩壊に伴い上部から一気に崩れた土層と考えられる。46～70cmほど掘り下げているが、１mピンポールを易々と頭まで突き刺すことが可能であることから、更に下方に続いているものと考えられる。遺物、遺構は検出されていない。



第11図　Ｔ４トレンチ土層断面実測図（S=1/40）

試掘調査作業風景

3．近代墓の周辺に集積された五輪塔群

ここでは近代墓の南西側に雑然と積み上げられていた五輪塔の部材について記載する。これらの部材は、開発予定地周辺に点在していたものを昭和48年頃にこの場所に集積されたものであり、傍らには「寺谷五輪塔群・昭和48年」と記された標柱が建てられていた。今回、空風輪1個、火輪7個、水輪1個、地輪4個を検出しているが、組み合わせの判明したものはなかった。

墓周辺に積み上げられた五輪塔の運搬風景

①空風輪（第12図8）

空風輪は第12図8の1個体が集積されていた。空輪頂部はなだらかに盛り上がる程度で突起と呼ぶべきか微妙である。風輪部の断面は円形、空輪部は楕円形で、円錐形タイプの枘をもつ。法量は、最大長24.2cm、枘部長3.3cm、空輪最大径15.7cm、風輪最大径14.2cm、括れ部最大径13.2cm、枘部最大径7.4cm、重量5.8kgを測る。括れ度は、括れ部：空輪部：風輪部：枘部＝1：1.19：1.08：0.56である。凝灰岩製であり、比較的丁寧な調整が施されている。

②火輪（第12・13図9～15）

火輪は7個体が集積されていた。9～12は凝灰岩製の火輪である。9は軒の上線と下線が平行して反り返るものである。枘穴はほぼ円形を呈し、最大径6.3cm、深さ最大5.7cmを測る。上面幅10.3×10.7cm、軒幅21.5×22.5cm、高さ15.0cm、重量11.20kgを測る。幅を10とした場合、高さの割合は10：6.3である。10～12は軒の上線と下線が中央部では平行であるが、端になると上線だけが反り返り降棟に続くものである。作りがやや雑な印象を受けるものであり、各面の軒の形は統一されていない。枘穴の平面は円形を呈し、高さの割合は10：4.0～10：6.3の中に分布する。法量は10が上面幅9.7×10.3cm・軒幅24.0×24.8cm・高さ13.2cm・重量11.85kg・枘穴上縁径6.8×7.5cm・深さ最大5.8cm、11が上面幅10.3cm・軒幅22.5×23.3cm・高さ9.6cm・重量6.6kg・枘穴上縁径6.5cm・深さ最大4.5cm、12が上面幅10.5×12.7cm、軒幅21.3×23.0cm、高さ14.1cm、重量9.50kg、枘穴上縁径6.5×7.0cm、深さ最大4.1cmを測る。

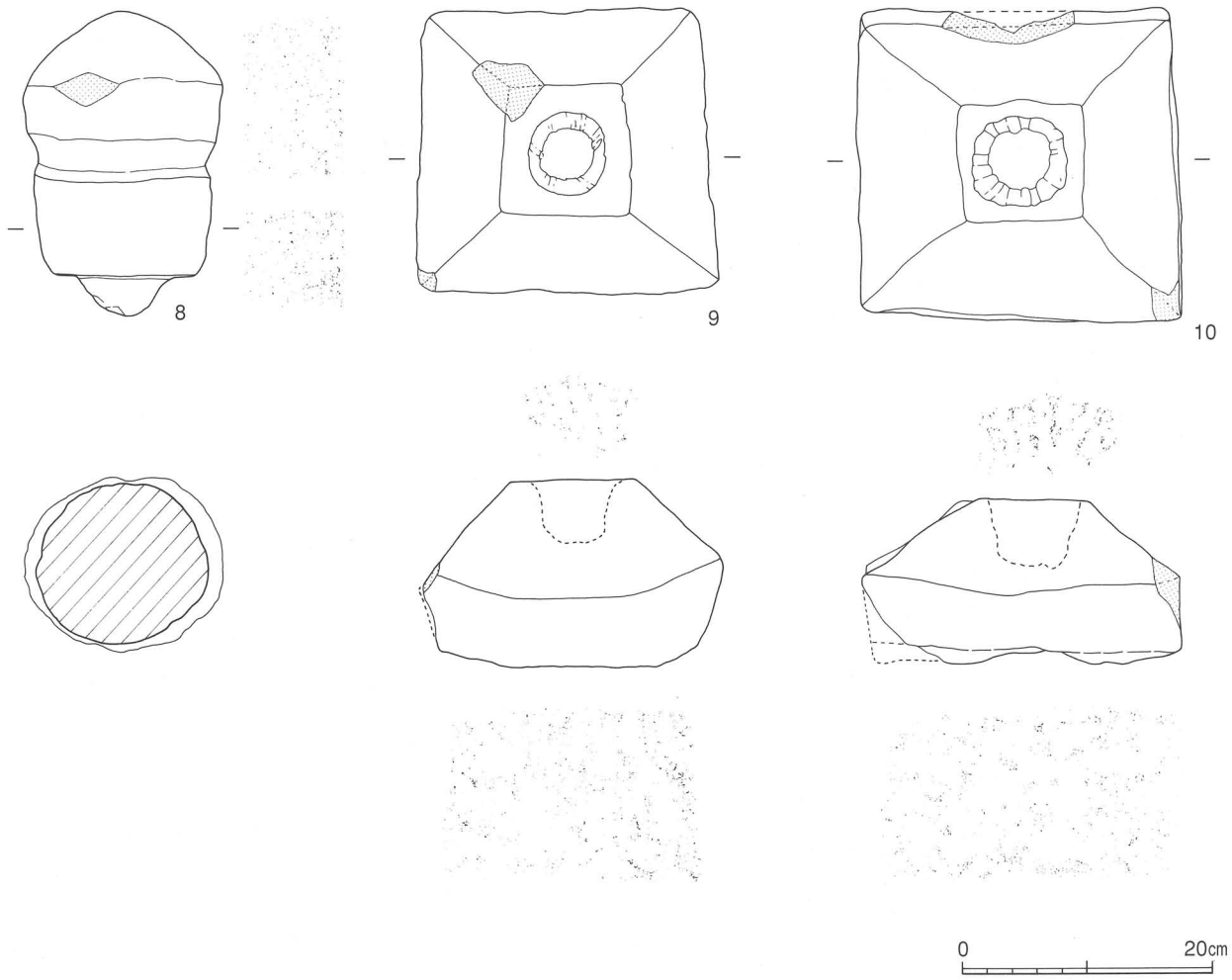
13～15は砂岩製の火輪である。13は軒の上線と下線が中央部では平行であるが、端になると上線だけが反り返り降棟に続くものである。枘穴の平面形は方形を呈する。法量は上面幅10.2×10.6cm、軒幅23.0×24.5cm、高さ9.9cm、重量6.0kg、枘穴上縁幅5.2×5.8cm、深さ最大4.2cmを測る。幅対高さの割合は10：4.0である。14は風化と剝離が著しく判然としないが、軒端では上線だけが反り返り降棟に続いている。枘穴の平面形は円形と思われる。法量は上面幅10.3×10.4cm、軒幅22.2×23.0cm、高さ11.4cm、重量6.5kg、枘穴上縁径5.0×5.5cm、深さ最大1.8cmを測る。幅対高さの割合は10：5.1である。15は枘穴の底部が僅かに残存しており火輪としたが、欠損が著しく形態の特徴など詳細はわからない。枘穴底部は方形を呈し、底部幅は5.1×5.3cmを測る。

③水輪（第 13 図 16）

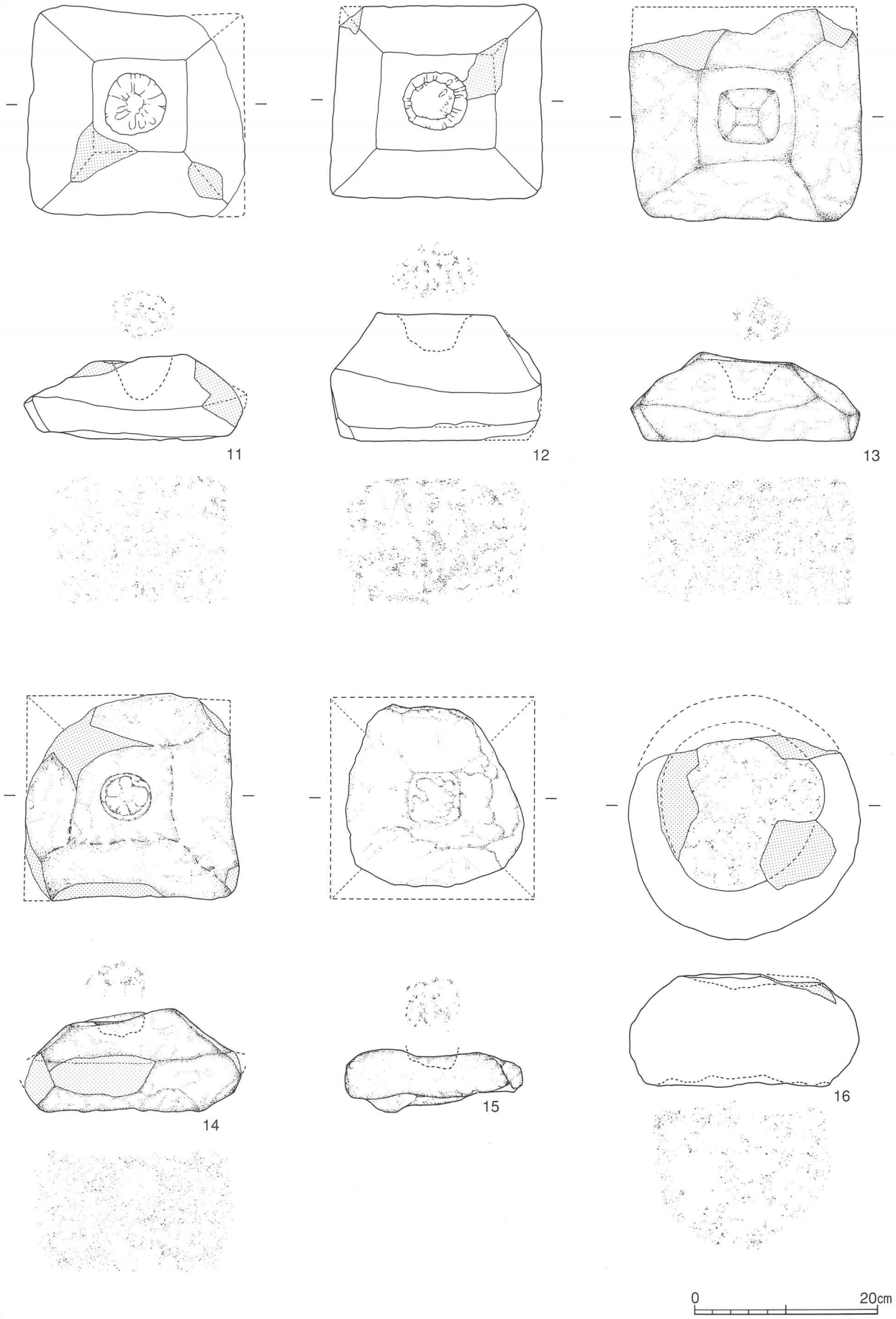
水輪は 1 個体が集積されていた。16は作りが雑で、平面、上面、下面ともやや歪な円形を呈している。また、胴部最大径の位置も場所によりまちまちである。天地の区別も判然としなかったため、座りの良い方を下面として掲載した。上面径約16.0㎝、下面径18.5㎝、胴部最大径26.0㎝、高さ12.4㎝を測る。石材は凝灰岩製である。胴部最大径に対する高さの割合は10：4.8である。

④地輪（第 14 図 17 ～ 20）

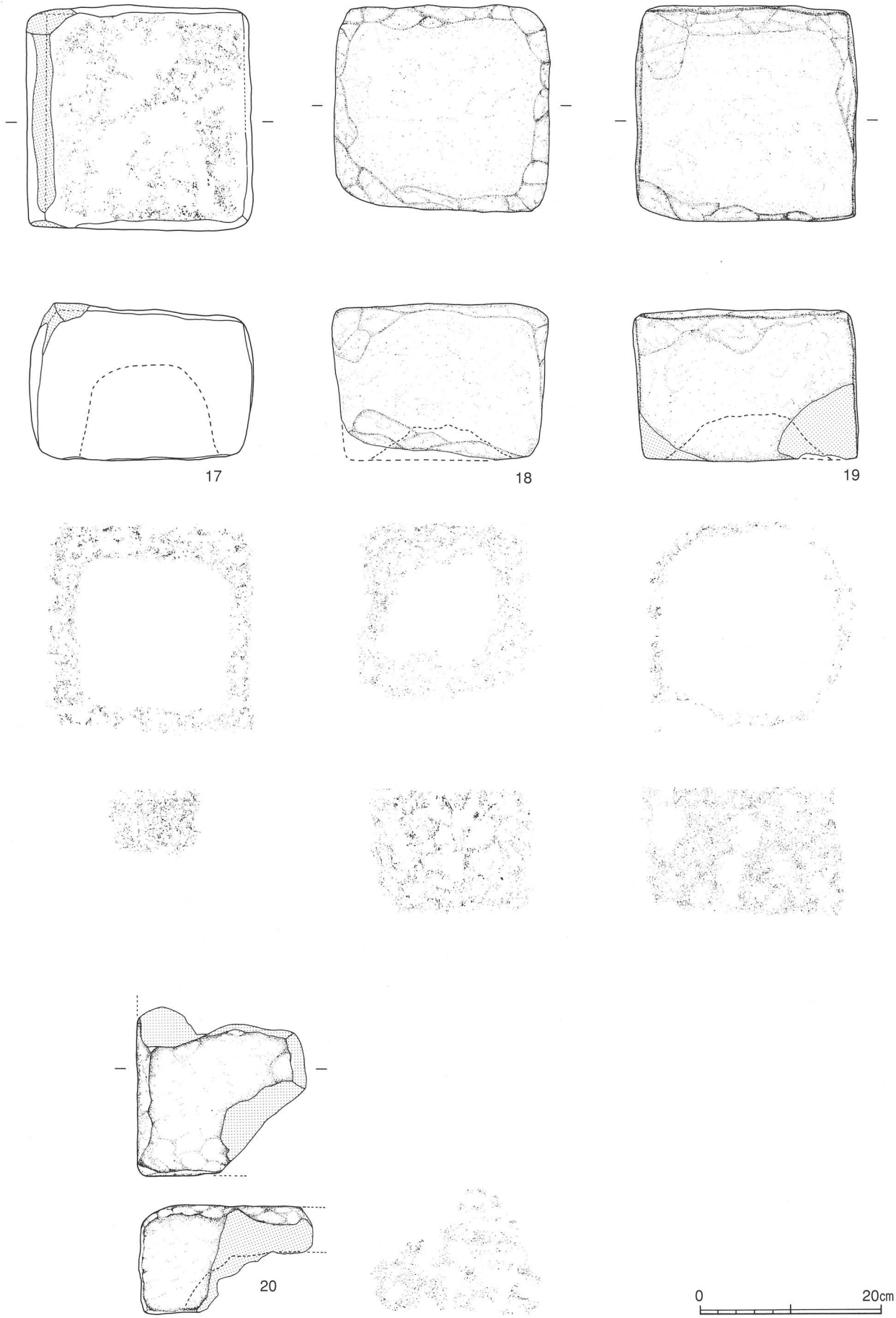
地輪は 4 個体が集積されていた。17は凝灰岩製の地輪である。凝灰岩製のものとしては珍しく底部が掘り窪められたものであり、これの他には村内で出土例がない。掘り窪められた内面は鑿痕も観察できないほど丁寧に仕上げられており、後世になって二次的に掘られた窪みの可能性も考えられる。[註3] 側面や底面の加工に比べると上面として掲載した側の加工は荒く、鑿痕が顕著である。法量は上面幅21.7×23.0㎝・下面幅22.5×22.8㎝・胴部中央幅24.5㎝であり、若干の胴張り状を呈する。高さ17.3㎝・重量16.0㎏、幅：高さは10：7.1である。18～20は砂岩製のものである。18・19は下面よりも上面の方がやや幅広に仕上げられたものであり、底部は掘り窪められ荒い加工痕が残る。法量は18が上面幅22.3×23.0㎝・下面幅19.0×20.5㎝・高さ16.9㎝・重量13.30㎏、幅：高さは10：7.6、19は上面幅22.7×23.5㎝・下面幅22.5×23.0㎝・高さ16.8㎝・重量14.40㎏、幅：高さは10：7.0である。20は地輪として掲載したが高さも12.1㎝ほどしかなく、他の砂岩製のものと比べ加工痕や刳り込み方に違いが見られる。近年の棟石、或いは建物の基礎の可能性も考えられる。



第12図　五輪塔空風輪・火輪実測図（S=1/6）



第13図　五輪塔火輪・水輪実測図（S=1/6）



第14図　五輪塔地輪実測図（S=1/6）

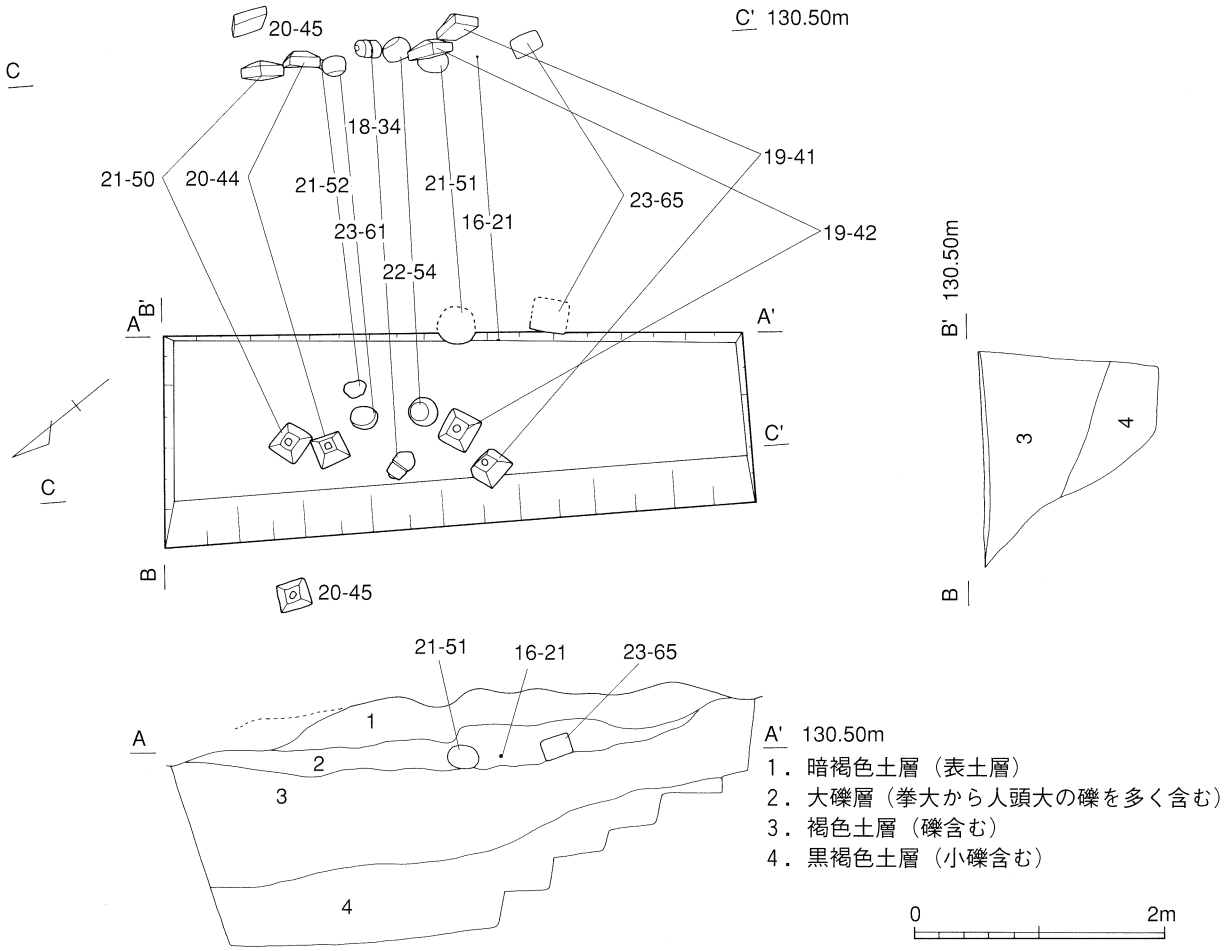
4．不時発見による五輪塔群の追加調査

ここでは土留め枠工の掘削工事中に不時発見された五輪塔と、それに伴い実施した追加調査の概要について記載する。五輪塔が多数出土したのは近代墓の南側約８ｍの位置であり、標高は130.25～131.00を測る。５月に実施した試掘調査時には急斜面のためトレンチを設定しなかった場所である。今回の調査区は西側が工事法面、東側が崖となっているため十分な調査面積がとれなかった。このため、1.4×５ｍの範囲をトレンチ状に掘削した。

①遺構と土層堆積状況

調査区の基本的な層序は、表土の第１層の下に拳大から人頭大の礫を含む第２層があり、第３層：褐色土層、第４層：黒褐色土層と続く。これらの層はいずれも崩落土層と考えられ、礫を多く含んでいる。第１・２層が遺物包含層、第３・４層が無遺物層である。第２層は調査区周辺だけに堆積している層であり、工事法面の中へ向かって更に続いている。斜面上側にあたる工事法面側から斜面下側方にあたる東側に向かって傾斜するように堆積しているが、周辺の斜面に比べると非常に緩やかである。ある時期に緩斜面があり、そこに堆積した層かもしれない。

五輪塔は、この第２層よりまとまって出土している。このため五輪塔を総て取り上げた後、第３層上面で遺構の精査を行ったが土壙等のプランは確認できなかった。更に30cmほど第３層を掘り下げた面で精査を試みたが遺構は確認できなかった。この後、念のため第３層を掘り抜き、第４層を60cmほど掘り下げたところで再び精査を行ったが何も検出されなかった。

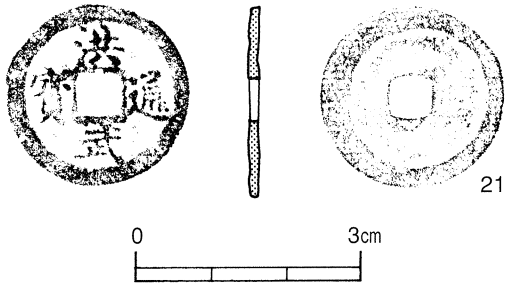


第15図　五輪塔の出土状況と調査区東壁の土層堆積状況実測図（S=1/60）

②出土遺物

今回の追加調査で出土した遺物には銭貨と五輪塔がある。五輪塔については第１層：暗褐色土層の表層に近い位置からと、第２層：大礫層上面から出土しているが、平面的にみれば調査区内の狭い範囲からまとまって出土しており、ここでは一括して取り扱った。

銭貨（第 16 図 21）　21 は第２層より出土した銭貨である。単独で出土しているためその性格は定かではないが、五輪塔が集積されている付近から出土しており、いわゆる「六道銭」として埋納されていたものかもしれない。法量[註4]は銭径(A) 24.60 ㎜、銭径(B) 24.48 ㎜、内径(C) 18.97 ㎜、内径(D) 18.87 ㎜、銭厚 1.17 ～ 1.21 ㎜、量目 1.8 g を測る。銭種は洪武通寶である。



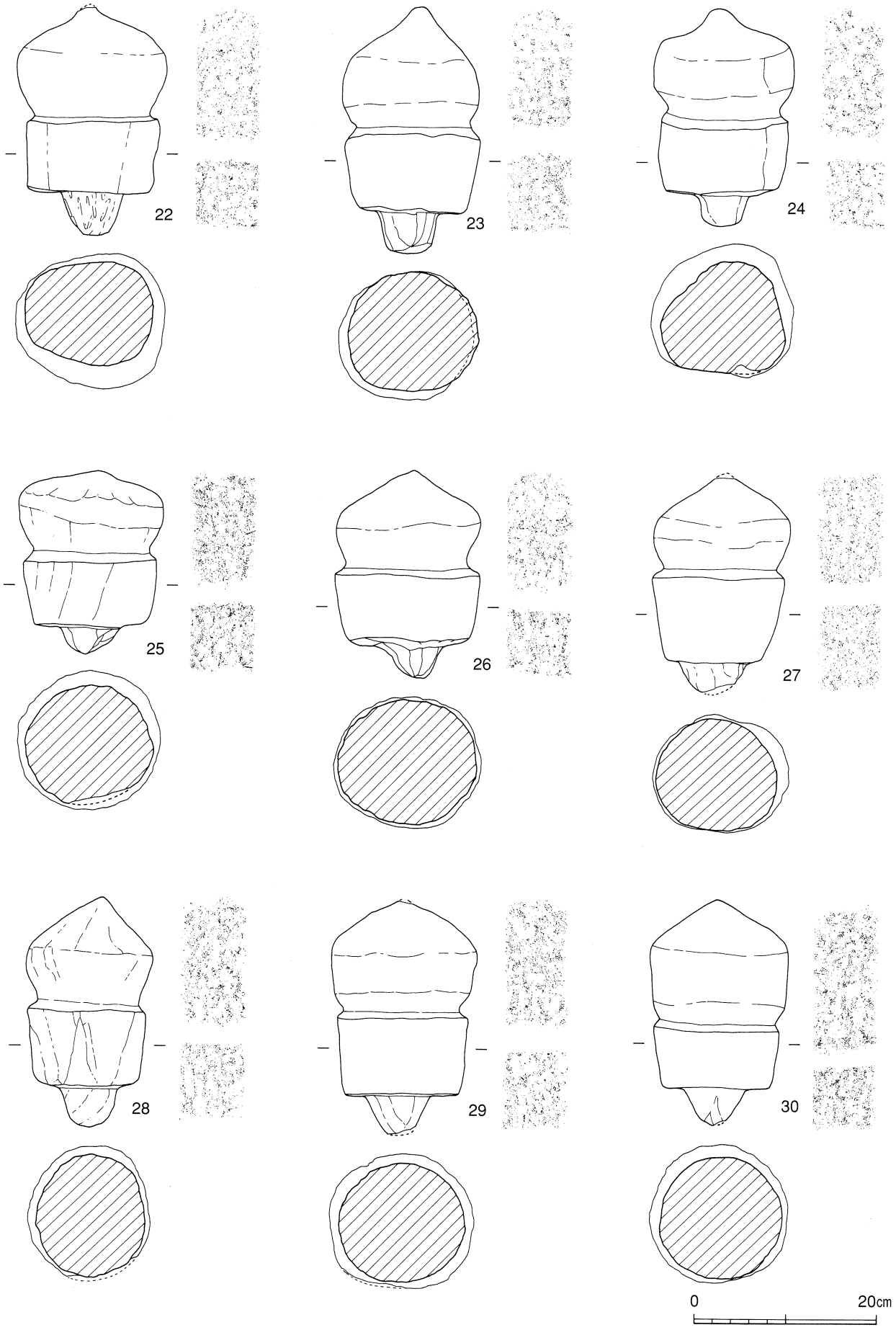
第16図　追加調査時出土銭貨拓本（S=1/1）

空風輪（第17図22～第18図37）　空風輪は16個体が出土している。平面形はバラエティーに富み、大きさには大小がある。最大は35の空輪頂部の最大径17.3㎝・重量8.50㎏を測るものであり、最小のものは欠損のため全容は定かではないが、空輪頂部の残存径14.0㎝・重量2.85㎏を測る33と思われる。石材は凝灰岩製(22～33)と砂岩製(34～37)があり、凝灰岩のものは頂部にしっかりとした突起をもつものが多く、砂岩のものは空輪頂部はなだらかに盛り上がる程度で突起と呼ぶべきか微妙なものである。全体的に左右不対象なものが多く、仕上げが雑な印象を受ける。

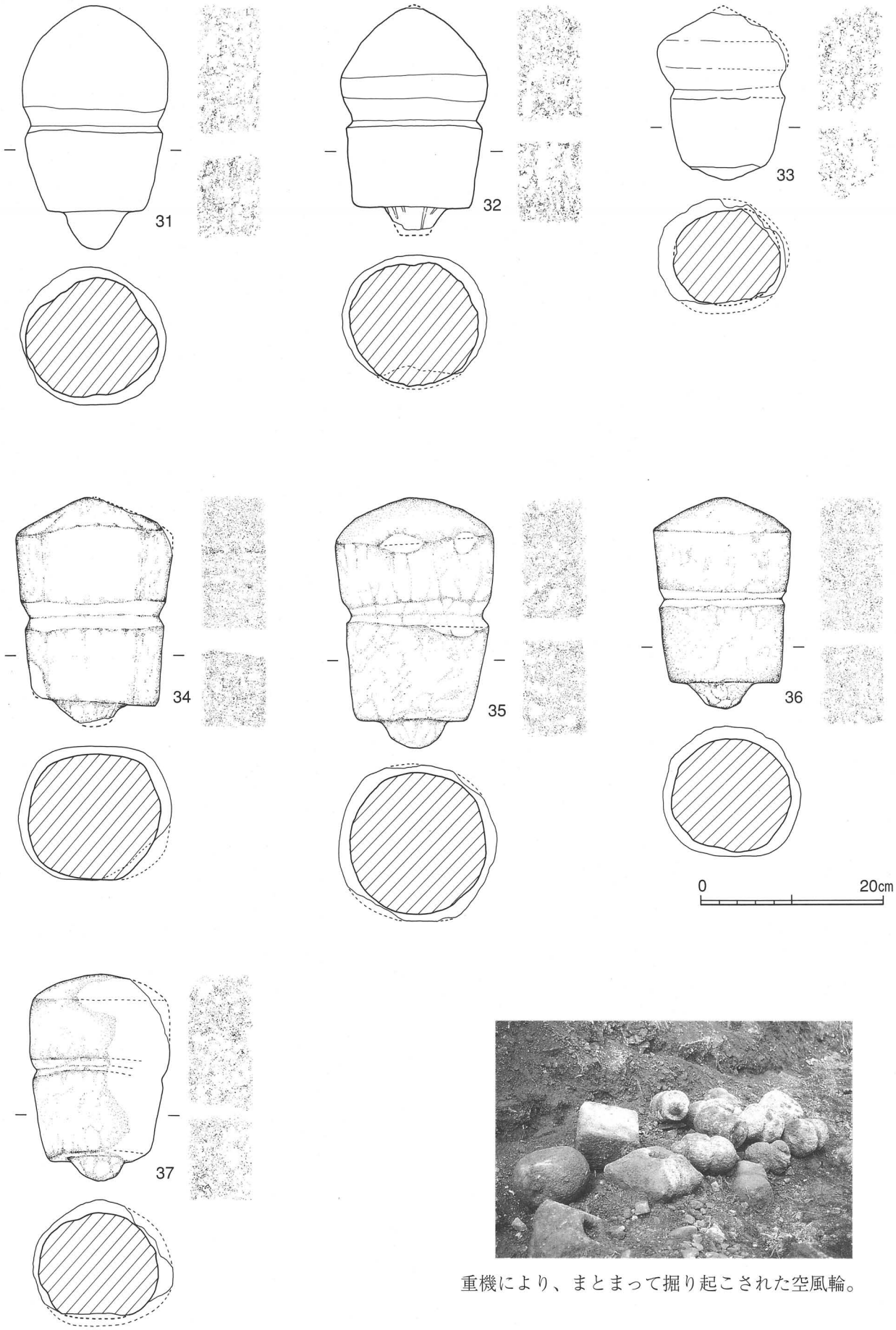
火輪（第19図38～第21図50）　火輪は13個体が出土している。大小があり、最大は49の軒幅27.7×28.6㎝・重量14.20㎏、最小は48の軒幅23.1×24.5㎝・残存重量6.75㎏を測るものである。石材には凝灰岩製(38～47)と砂岩製(48～50)のものがあり、凝灰岩製の38・39は軒の上線と下線が平行して反り返るものである。また、凝灰岩製の40～46と砂岩製の48～50は軒の上線と下線が中央部では平行であるが、端になると上線だけが反り返り降棟につづくものである。頂部に開けられた枘穴は砂岩では方形の占める割合の方が高く、凝灰岩では円形の占める割合が高い。

水輪（第21図51～第23図62）　水輪は12個体が出土している。大きさには大小があり、51・58・59が大きなものであり、52・61・62が小さい部類に入るものである。方形の石材を加工して作られているようで、56～59は側面に平坦な面をもつ。石材には凝灰岩製(51～57)と砂岩製(58～62)のものがある。凝灰岩製のものは、胴の部分が良く張り出すものであるが、胴部最大径の位置は形の崩れているものが多く、同一個体においてもばらつきがみられた。上面と下面は若干掘り窪められている。また、天地の区別をつけがたいものや平面形が歪なものが多い。砂岩製のものは、底面が大きく掘り窪められている。

地輪（第23図63～第25図75）　地輪は13個体が出土しており、大きさには大小がある。完形ならば最大と考えられるのが71、最小が胴部幅23.8㎝・重量15.1㎏を測る67である。石材には凝灰岩製(63～73)と砂岩製(74・75)のものがある。凝灰岩製のものは底部に荒いノミ痕が残る無調整のものであり、砂岩製のものは底部が掘り窪められている。凝灰岩製の72・73には上面に黒色を呈する煤状の付着物が認められた。元々の石材の色ではなく、加工後に付着したものと考えられる[註5]。分析に出していないため詳細は定かではない。

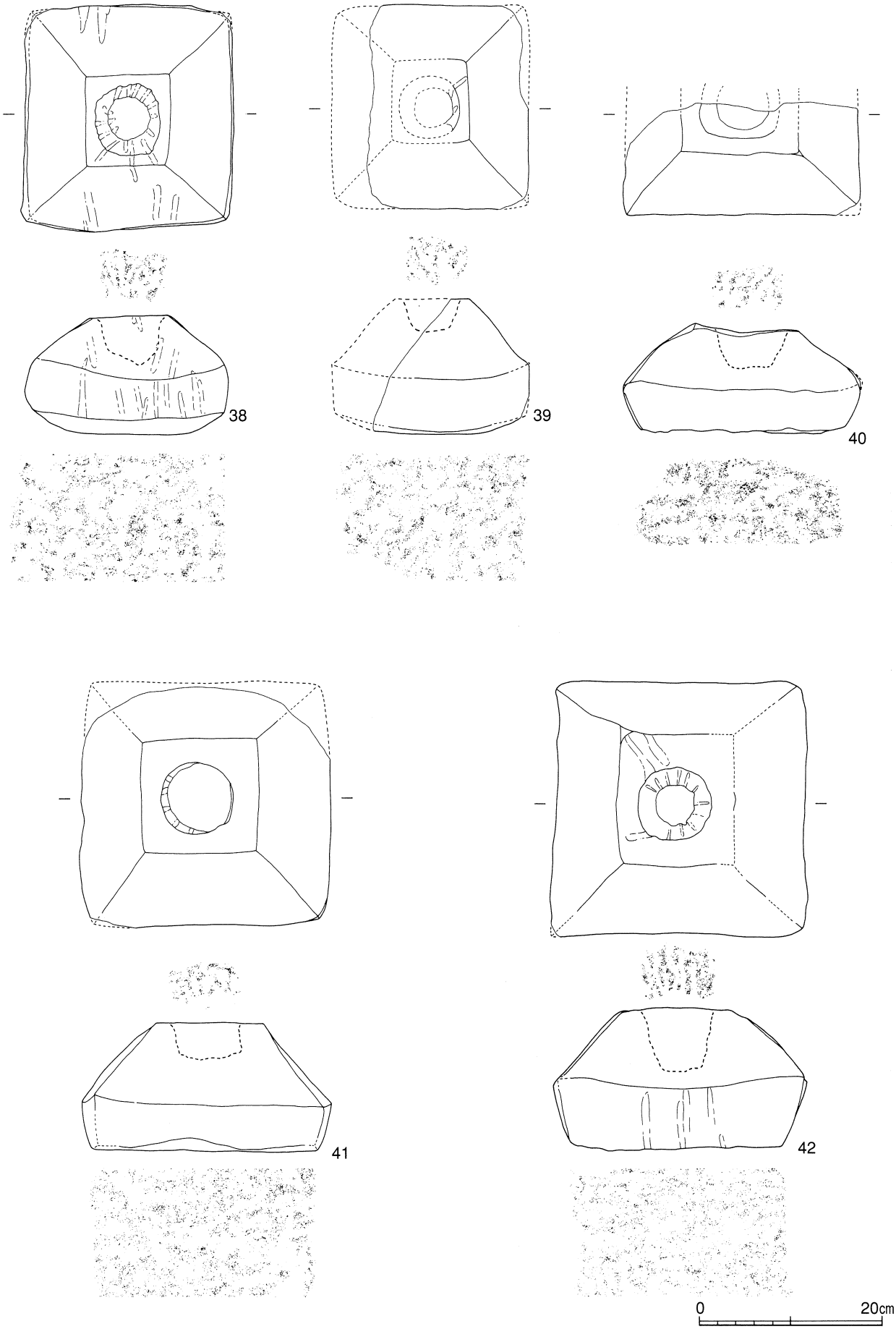


第17図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔空風輪実測図（S=1/6）

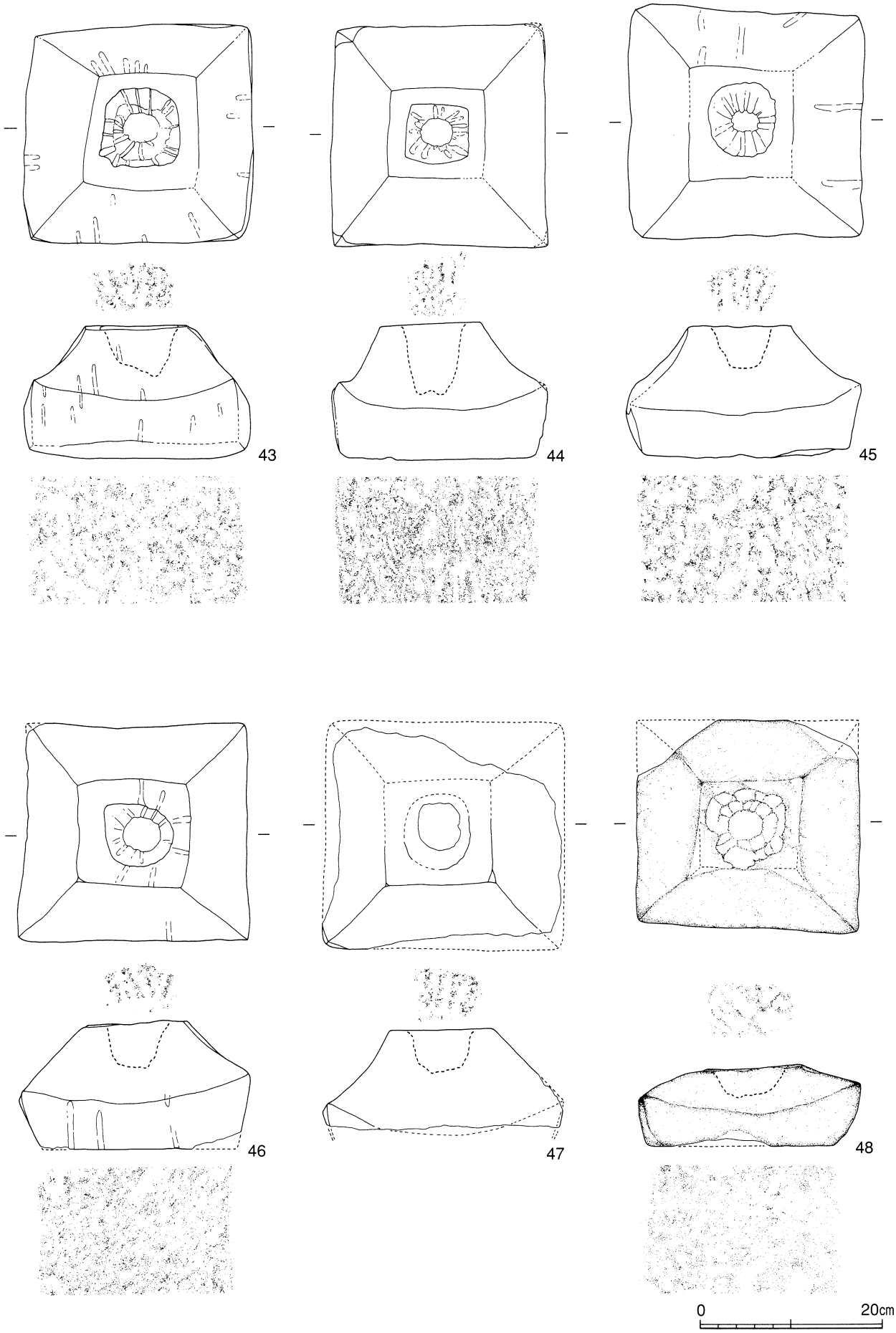


重機により、まとまって掘り起こされた空風輪。

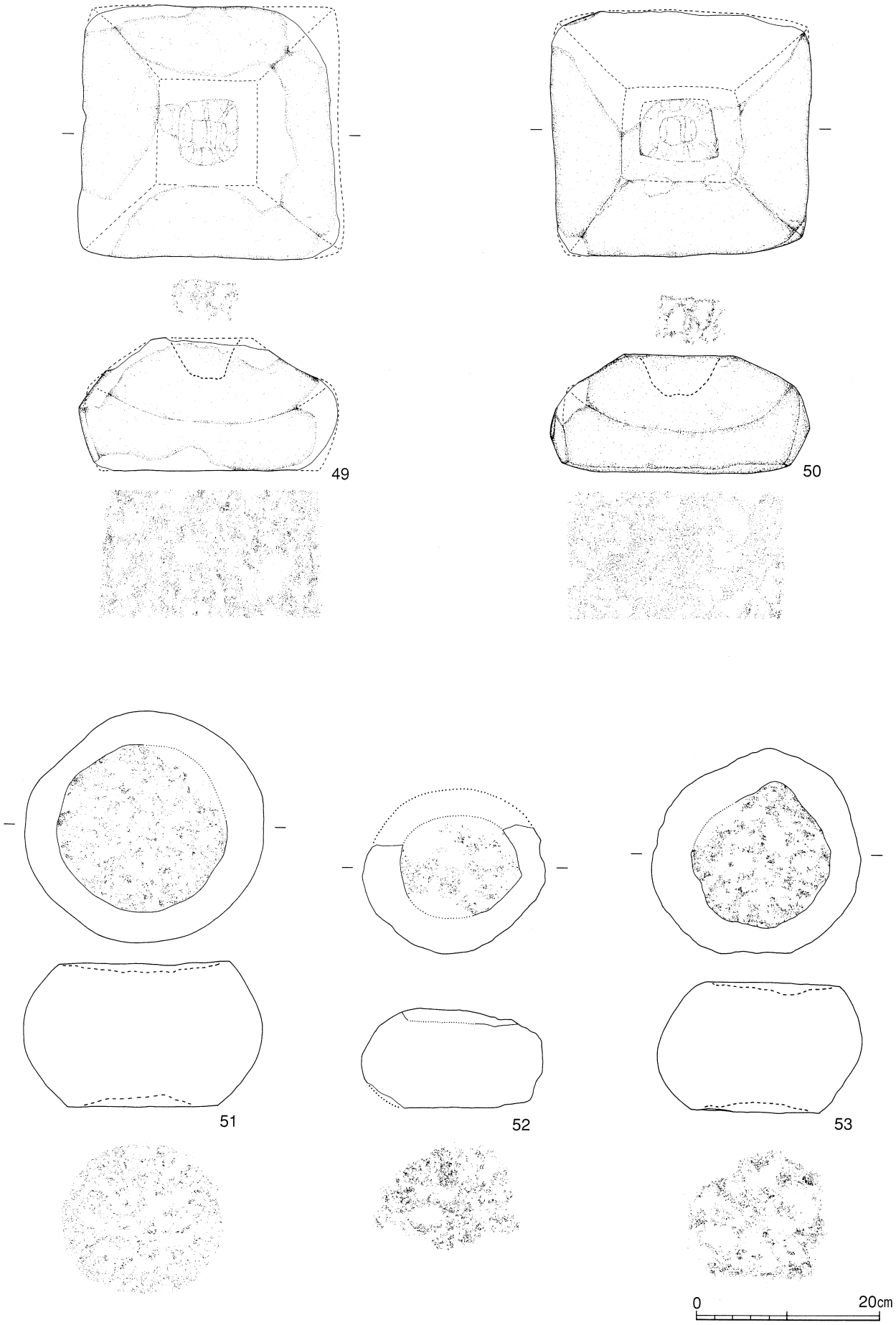
第18図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔空風輪実測図（S=1/6）



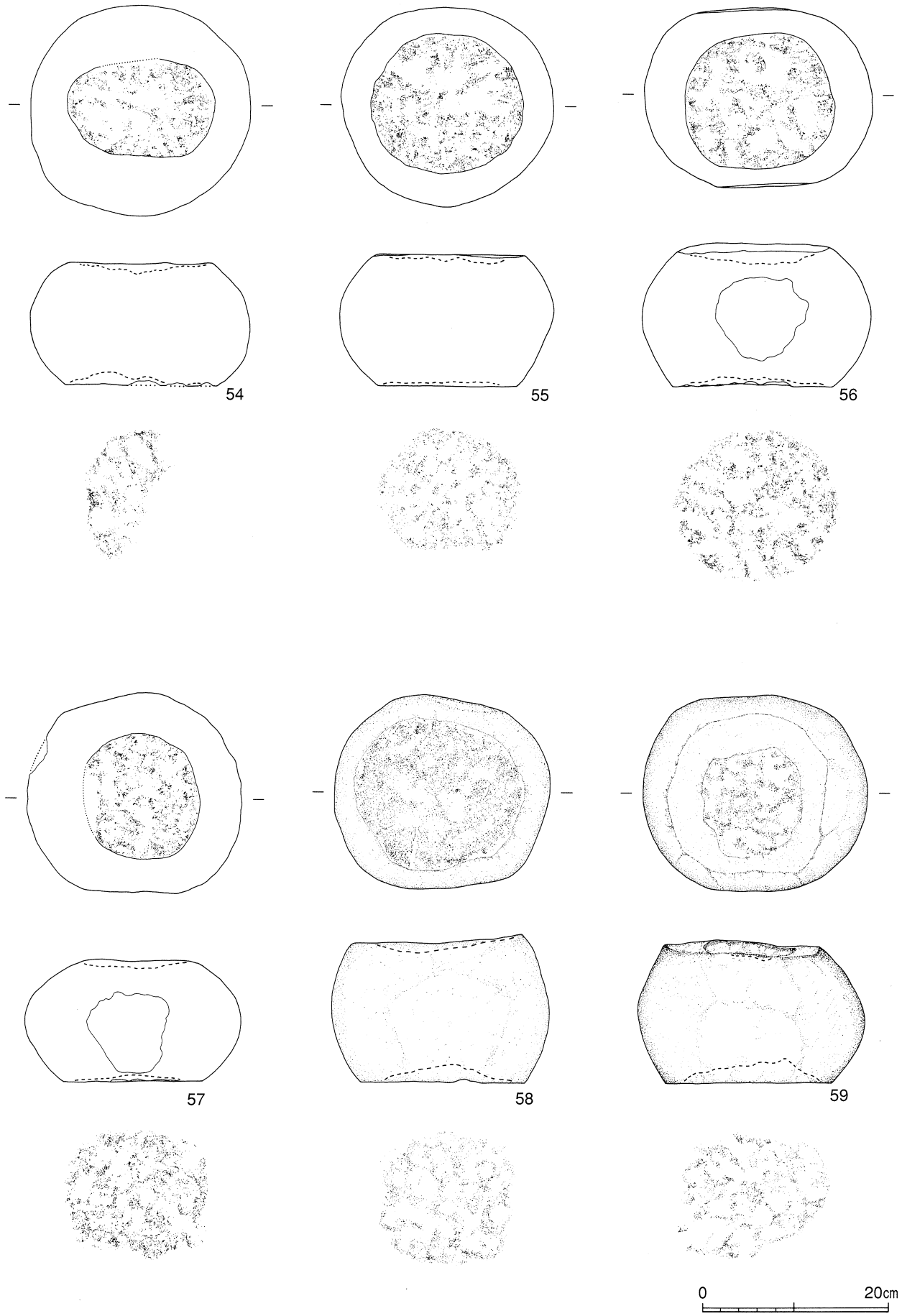
第19図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔実測図（S=1/6）



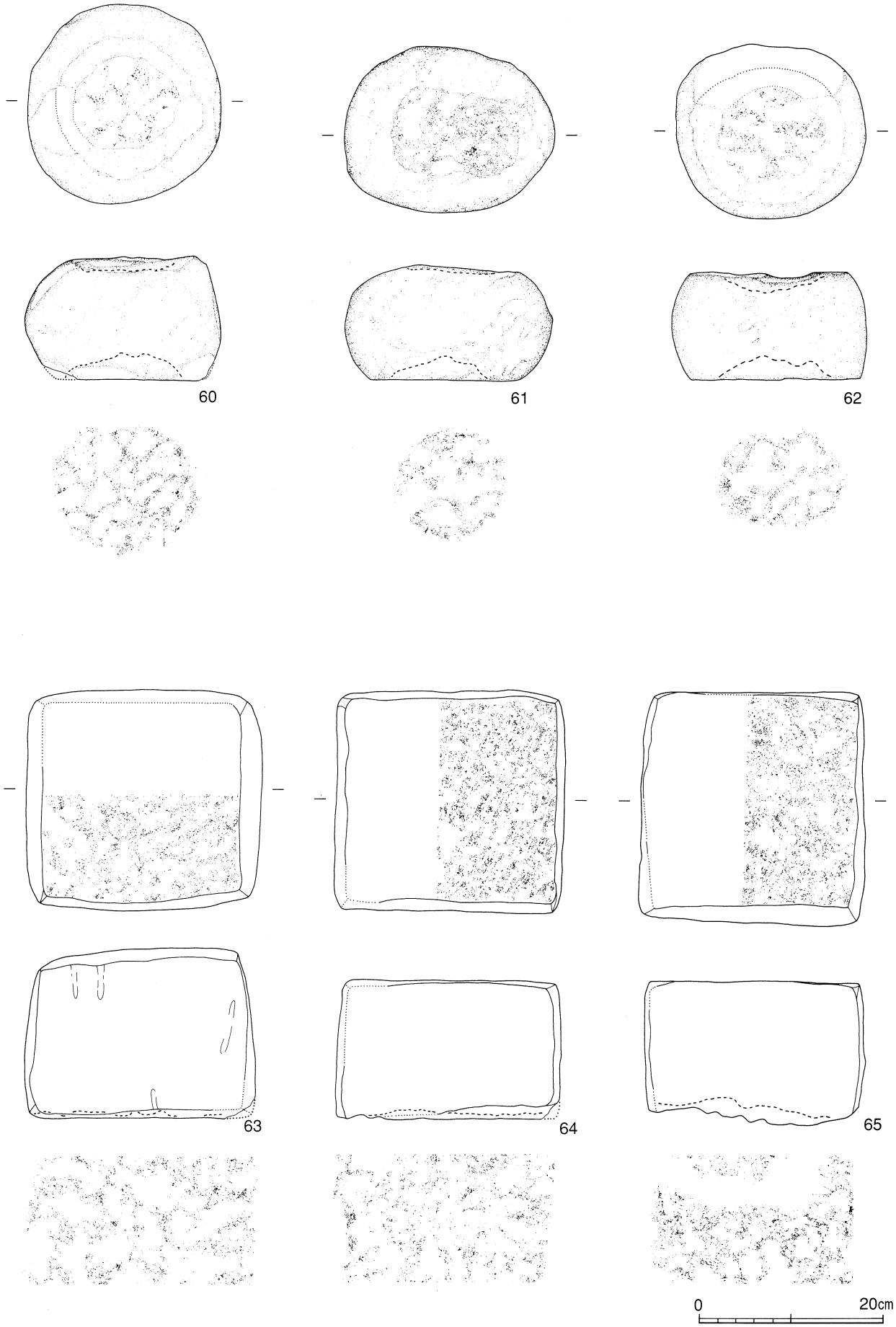
第20図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔実測図（S=1/6）



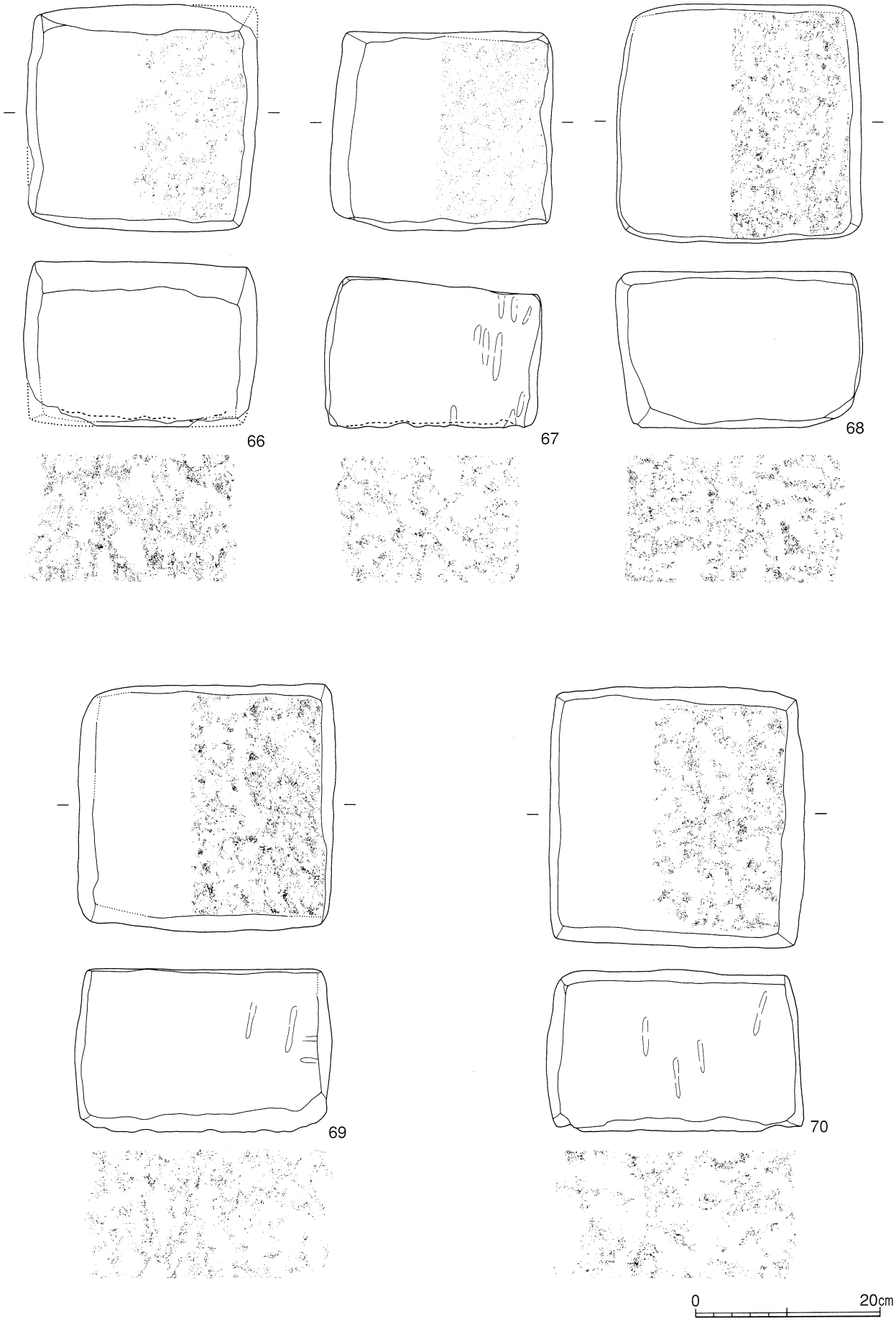
第21図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔実測図（S=1/6）



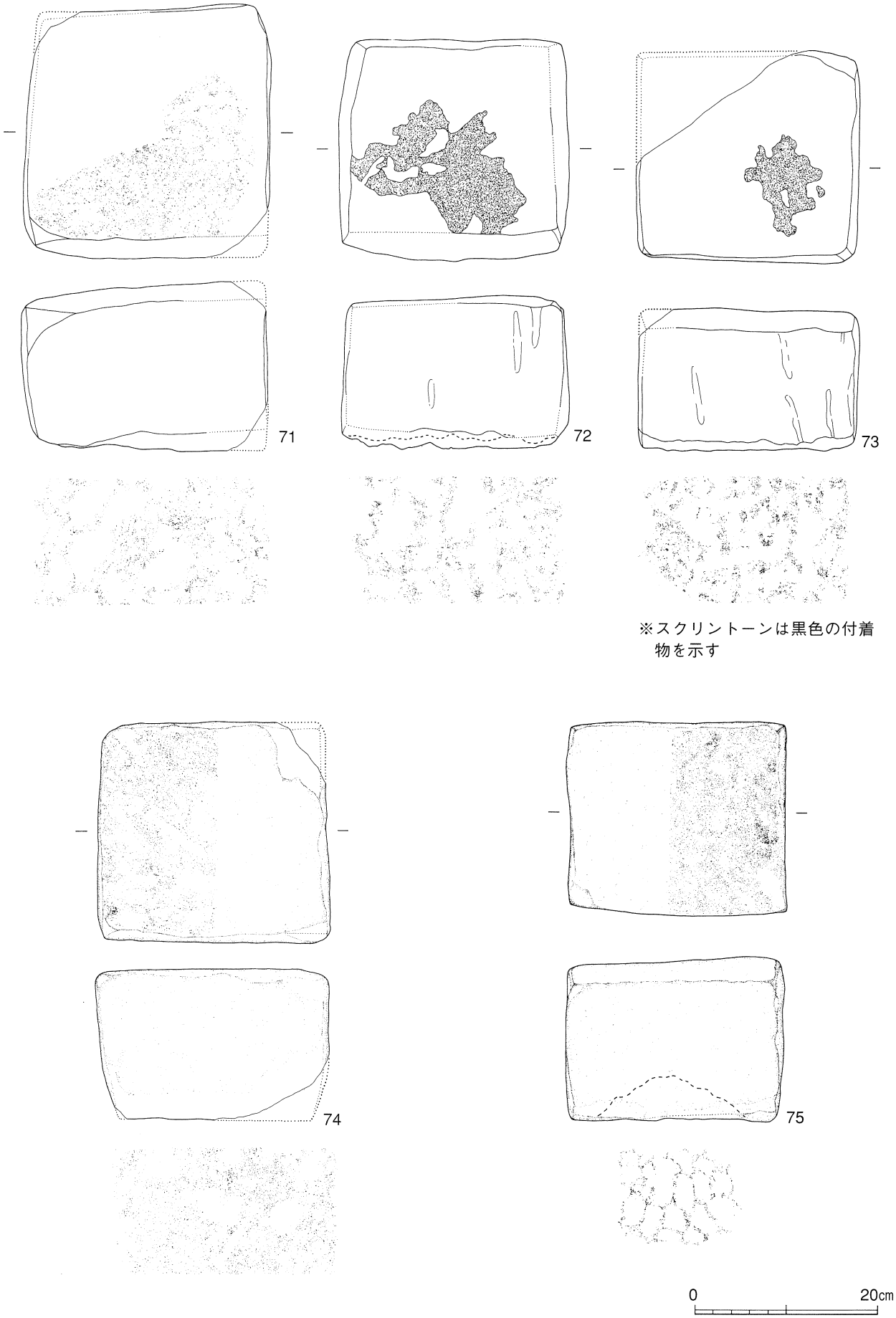
第22図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔実測図（S=1/6）



第23図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔実測図（S=1/6）



第24図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔実測図（S=1/6）



第25図　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔実測図（S=1/6）

第２表　寺谷五輪塔群立会調査時出土五輪塔（火輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点・土層	上面幅	軒　幅	下面幅	高さ	枘穴平面形	枘穴上縁幅	枘穴深さ	幅：高さ	重量（kg）	残存状況	石材
5-5	レールの足場表層付近	11.0×13.5	残存 25.5×26.2	23.0×残存 23.0	12.0	楕円形	7.5×8.0	4.7	10:4.5	9.60	一部欠損	砂岩

第３表　寺谷五輪塔群試掘調査時出土五輪塔（地輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点	上面幅	下面幅	高さ	胴部幅：高さ	重量（kg）	残存状況	石材
8-7	Ｔ２トレンチ	22.7×23.0	21.5×21.5	15.7	10:6.8	11.15	一部剝離	砂岩

第４表－１　近代墓周辺に集積された五輪塔（空風輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点	最大長	枘を除く長さ	空輪径(A)	風輪径(B)	括れ部径(C)	枘径(D)	括れ度(C:A:B:D)	重量(kg)	枘タイプ	残存状況	石材	備考
12-8	近代墓の南西側に野積み	24.2	20.9	15.7	14.2	13.2	7.4	1:1.19:1.08:0.56	5.80	円錐	一部剝離	凝灰岩	空輪部断面は楕円形を呈する。

第４表－２　近代墓周辺に集積された五輪塔（火輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点	上面幅	軒幅	下面幅	高さ	枘穴平面形	枘穴上縁幅	枘穴深さ	幅：高さ	重量(kg)	残存状況	石材
12- 9	近代墓の南西側に野積み	10.3×10.7	21.5×22.5	19.3×20.0	15.0	円形	6.0×6.3	5.7	10:6.3	11.20	一部剝離	凝灰岩
12-10	近代墓の南西側に野積み	9.7×10.3	24.0×24.8	24.2×25.5	13.2	円形	6.8×7.5	5.8	10:5.2	11.85	一部欠損	凝灰岩
13-11	近代墓の南西側に野積み	10.2×10.3	22.5×残存 23.3	20.5×21.0	9.6	円形	6.5×6.5	4.5	10:4.0	6.60	一部欠損	凝灰岩
13-12	近代墓の南西側に野積み	10.5×12.7	21.3×23.0	20.0×21.5	14.1	円形	6.5×7.0	4.1	10:6.1	9.50	一部剝離	凝灰岩
13-13	近代墓の南西側に野積み	10.2×10.6	残存 23.0×24.5	残存 20.5×23.0	9.9	方形	5.2×5.8	4.2	10:4.0	6.00	一部欠損	砂岩
13-14	近代墓の南西側に野積み	10.3×10.4	残存 22.2×23.0	残存 22.0×残存 22.0	11.4	上部欠損の為不明（円形か？）	残存 5.0×残存 5.5	残存 1.8	10:5.1	6.50	一部欠損	砂岩
13-15	近代墓の南西側に野積み	欠損の為不明	欠損の為不明	欠損の為不明	欠損の為不明	不明（方形か？）	欠損の為不明	欠損の為不明	－	2.70	大部分欠損	砂岩

第４表－３　近代墓周辺に集積された五輪塔（水輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点	平面形	上面径	下面径	最大径	高さ	最大径の位置（%）	最大径：高さ	重量(kg)	残存状況	石材	備考
13-16	近代墓の南西側に野積み	欠損の為不明（円形か？）	14.5×残存 16.0	残存 16.0×18.5	26.0	12.4	54.3 or 45.7	10:4.8	7.90	一部欠損	凝灰岩	平坦面なし

第４表－４　近代墓周辺に集積された五輪塔（地輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点	上面幅	下面幅	高さ	胴部幅：高さ	重量（kg）	残存状況	石材	備考
14-17	近代墓の南西側に野積み	21.7 × 23.0	22.5 × 22.8	17.3	10:7.1	16.00	一部欠損	凝灰岩	
14-18	近代墓の南西側に野積み	22.3 × 23.0	残存 19.0 ×残存 20.5	16.9	10:7.6	13.30	一部欠損	砂岩	
14-19	近代墓の南西側に野積み	残存 22.7 × 23.5	残存 22.5 ×残存 23.0	16.8	10:7.0	14.40	一部欠損	砂岩	
14-20	近代墓の南西側に野積み	欠損の為不明	欠損の為不明	12.1	―	3.50	大部分欠損	砂岩	地輪？

第５表－１　寺谷五輪塔群追加調査時出土五輪塔（空風輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点・土層	最大長	枘を除く長さ	空輪径(A)	風輪径(B)	括れ部径(C)	枘径(D)	括れ度(A:C:B:D)	重量(kg)	枘タイプ	残存状況	石材
17-22	工事中（表層付近）	24.9	20.0	16.3	14.6	12.6	6.6	1.29:1:1.16:0.52	5.75	円錐	一部欠損	凝灰岩
17-23	工事中（第２層上面）	27.1	22.4	14.9	14.7	12.6	7.0	1.18:1:1.17:0.56	5.75	円柱	完形	凝灰岩
17-24	工事中（第２層上面）	23.8	20.3	15.2	13.8	12.1	6.0	1.26:1:1.14:0.50	7.25	円柱	一部欠損	凝灰岩
17-25	工事中（第２層上面）	20.0	17.0	15.8	14.6	12.7	6.6	1.24:1:1.15:0.52	4.80	円錐	一部欠損	凝灰岩
17-26	工事中（第２層上面）	22.7	18.6	15.7	15.9	13.1	7.7	1.20:1:1.21:0.59	5.65	円錐	完形	凝灰岩
17-27	第２層	23.4	20.3	14.8	14.4	12.2	7.7	1.21:1:1.18:0.63	5.00	円錐	一部欠損	凝灰岩
17-28	工事中（第２層上面）	25.1	21.0	13.7	12.8	11.0	6.8	1.25:1:1.16:0.62	4.75	円錐	一部欠損	凝灰岩
17-29	工事中（第２層上面）	25.4	21.1	15.8	14.2	12.6	7.1	1.25:1:1.13:0.56	5.85	円錐	一部欠損	凝灰岩
17-30	第２層	24.6	20.5	15.0	13.7	12.5	7.0	1.20:1:1.10:0.56	5.95	円錐	完形	凝灰岩
18-31	第２層	26.5	22.3	15.8	14.9	13.8	7.0	1.14:1:1.08:0.51	6.50	円錐	完形	凝灰岩
18-32	工事中（第２層上面）	24.3	21.7	15.9	14.9	13.5	7.1	1.18:1:1.10:0.53	6.10	円錐	一部欠損	凝灰岩
18-33	工事中（第２層上面）	18.3	16.9	残存 14.0	12.4	11.5	欠損の為不明	1.22:1:1.08: 不明	2.85	椀形？	一部欠損	凝灰岩
18-34	第２層	24.5	22.1	17.0	15.0	14.0	8.3	1.21:1:1.07:0.59	6.95	円錐	一部欠損	砂岩
18-35	工事中（第２層上面）	27.2	24.0	17.3	15.4	14.3	8.0	1.21:1:1.08:0.56	8.50	円錐	一部欠損	砂岩
18-36	第２層	23.2	20.2	15.0	13.7	12.8	7.3	1.17:1:1.07:0.57	5.70	円錐	完形	砂岩
18-37	工事中（表層付近）	22.5	19.3	残存 15.2	14.1	13.5	6.0	1.13:1:1.04:0.44	4.40	円錐	一部欠損	砂岩

第５表－２　寺谷五輪塔群追加調査時出土五輪塔（火輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点・土層	上面幅	軒幅	下面幅	高さ	枘穴平面形	枘穴上縁幅	枘穴深さ	幅：高さ	重量（kg）	残存状況	石材
19-38	工事中（第２層上面）	8.5 × 9.8	21.9 × 23.1	21.5 × 24.0	13.0	不整形（円形をめざしたものか）	7.0 × 7.5	5.4	10:5.3	9.30	一部欠損	凝灰岩
19-39	工事中（第２層上面）	9.1 × 欠損の為不明	残存 21.8 × 欠損の為不明	残存 21.0 × 欠損の為不明	14.8	欠損の為不明（円形か？）	欠損の為不明	残存 3.3	10:6.6	5.90	半分欠損	凝灰岩
19-40	工事中（第２層上面）	12.6 ×欠損の為不明	25.9 ×欠損の為不明	22.5 ×欠損の為不明	11.9	欠損の為不明（隅丸方形か）	残存 7.2 × 欠損の為不明	4.7	10:4.6	4.75	半分欠損	凝灰岩
19-41	第２層	12.5 × 13.0	残存 26.1 × 26.7	残存 19.2 × 24.5	14.0	円形	径 7.0	4.1	10:5.2	12.83	一部欠損	凝灰岩
19-42	第２層	残存 11.5 × 14.5	25.5 × 26.0	23.2 × 24.0	15.4	円形	径 7.8	6.9	10:5.7	16.90	一部欠損	凝灰岩
20-43	第２層	10.5 × 12.3	22.5 ×残存 23.5	21.5 × 22.5	14.7	不整形（方形をめざしたものか）	8.0 × 8.3	5.6	10:5.9	12.10	一部欠損	凝灰岩
20-44	第２層	9.5 × 10.3	23.8 × 24.5	22.0 × 22.5	15.0	方形	5.0 × 6.5	8.0	10:6.1	12.00	一部欠損	凝灰岩
20-45	第２層	残存 11.4 × 残存 12.4	24.5 × 25.6	22.5 × 24.0	14.6	不整形	7.0 × 7.0	4.7	10:5.7	12.60	一部欠損	凝灰岩
20-46	工事中（第２層上面）	11.8 × 12.0	23.7 × 23.8	残存 21.5 × 22.0	14.0	円形	6.5 × 6.8	5.1	10:5.5	12.35	一部欠損	凝灰岩
20-47	工事中（表層付近）	11.8 ×欠損の為不明	残存 24.1 × 残存 26.0	欠損の為不明	残存 11.0	楕円形	7.0 × 欠損の為不明	4.8	欠損の為不明	6.00	一部欠損	凝灰岩
20-48	第２層	残存 9.8 × 11.0	残存 23.1 × 24.5	残存 19.0 × 21.0	9.0	不整形（方形をめざしたものか）	8.5 × 8.7	3.4	10:3.7	6.75	一部欠損	砂岩
21-49	第２層	欠損の為不明	残存 27.7 × 28.6	22.5 × 22.8	残存 14.5	隅丸方形	5.5 × 6.5	残存 4.6	欠損の為不明	14.20	一部欠損	砂岩
21-50	第２層	13.0 ×欠損の為不明	残存 26.8 × 残存 27.7	22.5 × 23.5	13.0	方形	5.0 × 8.0	4.5	10:4.5	12.45	一部欠損	砂岩

第５表－３　寺谷五輪塔群追加調査時出土五輪塔（水輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点	平面形	上面径	下面径	最大径	高さ	最大径の位置（%）	最大径：高さ	重量（kg）	残存状況	石材	備考
21-51	第２層	ほぼ円形	18.0 × 18.5	径 17.0	26.4	16.0	46.9 or 53.1	10:6.1	12.85	一部欠損	凝灰岩	
21-52	第２層	欠損の為不明	残存 9.0 × 13.0	残存 11.0 × 残存 14.0	残存 19.7	10.9	45.9 or 54.1	10:5.5	3.35	半分摩滅欠損	凝灰岩	
21-53	工事中（第２層上面）	歪な円形	15.1 × 16.0	残存 15.0 × 16.0	23.3	14.3	49.7 or 50.3	10:6.1	8.70	一部欠損	凝灰岩	
22-54	第２層	ほぼ円形	残存 10.8 × 16.0	残存 16.1 × 残存 18.0	24.6	13.6	47.1 or 52.9	10:5.5	9.20	一部欠損	凝灰岩	
22-55	第２層	円形	15.5 × 16.0	残存 13.0 × 15.0	22.8	14.6	45.9 or 54.1	10:6.4	9.65	一部欠損	凝灰岩	
22-56	工事中（第２層上面）	楕円形	14.8 × 16.1	16.0 × 17.2	24.5	15.9	45.9 or 54.1	10:6.5	10.6	完形	凝灰岩	側面に平坦部あり
22-57	工事中（表層付近）	歪な円形	径 14.0	径 15.0	24.0	13.5	49.6 or 50.4	10:5.6	8.75	一部欠損	凝灰岩	側面に平坦部あり

単位（cm）

挿図番号	出土地点	平面形	上面径	下面径	最大径	高さ	最大径の位置（%）	最大径：高さ	重量（kg）	残存状況	石材	備考
22-58	工事中（表層付近）	歪な円形	16.0 × 18.0	17.0 × 17.5	23.4	16.4	50.0 or 50.0	10:7.0	10.70	完形	砂岩	側面に平坦部あり
22-59	工事中（表層付近）	楕円形	17.0 × 17.2	16.9 × 19.0	24.4	15.7	44.6 or 55.4	10:6.4	10.60	完形	砂岩	側面に平坦部あり
23-60	工事中（表層付近）	歪な円形	15.0 × 16.1	径 17.8	22.5	13.6	39.7 or 60.3	10:6.0	7.35	一部欠損	砂岩	
23-61	第２層	不整形	残存 8.5 × 15.1	14.8 × 17.0	22.6	12.6	47.6 or 52.4	10:5.6	5.70	一部摩滅	砂岩	
23-62	工事中（第２層上面）	ほぼ円形か？（欠損あり）	残存 12.0 × 16.8	残存 16.0 × 17.0	21.3	11.7	43.6 or 56.4	10:5.5	5.65	一部欠損	砂岩	

第５表－４　寺谷五輪塔群追加調査出土五輪塔（地輪）観察表

単位（cm）

挿図番号	出土地点	上面幅	下面幅	高さ	胴部幅：高さ	重量（kg）	残存状況	石材	備考
23-63	工事中（表層付近）	残存20.5×22.0	23.0 × 24.2	18.6	10:7.3	20.00	一部欠損	凝灰岩	
23-64	工事中（表層付近）	22.8 × 23.0	22.8 ×残存 23.8	15.2	10:6.2	16.90	一部欠損	凝灰岩	
23-65	第２層	23.0 × 23.5	残存 23.0 ×残存 23.0	残存 15.7	10:6.2	16.90	一部欠損	凝灰岩	
24-66	工事中（表層付近）	22.2 × 23.5	残存 23.0 ×残存 23.5	18.0	10:7.2	19.05	一部欠損	凝灰岩	
24-67	工事中（第２層上面）	20.5 × 21.8	18.5 × 22.2	16.5	10:6.9	15.10	一部欠損	凝灰岩	
24-68	工事中（第２層上面）	24.5 × 25.5	19.5 × 23.0	17.1	10:6.4	20.45	一部欠損	凝灰岩	
24-69	工事中（第２層上面）	25.0 × 26.0	23.0 × 27.0	17.9	10:6.4	24.60	一部欠損	凝灰岩	
24-70	工事中（表層付近）	25.0 × 26.0	26.6 × 27.5	17.7	10:6.2	25.10	一部剥離	凝灰岩	
25-71	工事中（第２層上面）	残存21.0×24.5	残存 21.0 × 26.1	18.5	10:6.8	20.30	一部欠損	凝灰岩	
25-72	工事中（表層付近）	21.5×残存23.5	23.5 × 24.0	16.7	10:6.7	17.85	一部欠損	凝灰岩	上面の一部に黒色の付着物
25-73	工事中（表層付近）	残存18.2×22.2	22.1 × 23.2	15.6	10:6.5	12.55	一部欠損	凝灰岩	上面の一部に黒色の付着物
25-74	工事中（表層付近）	24.0 × 25.2	残存 22.5 ×残存 23.5	16.5	10:6.5	15.35	一部欠損	砂岩	
25-75	第２層	20.5 × 23.0	20.3 × 22.5	17.7	10:7.4	14.5	一部欠損	砂岩	

第６表　寺谷五輪塔群追加調査時出土銭貨観察表

単位（mm）

挿図番号	銭名	初鋳年	時代	出土地点・土層	銭径(A)／銭径(B)		内径(C)／内径(D)		銭厚	量目（g）
16-21	洪武通寶	1368 年	明	第２層	24.60	24.48	18.97	18.87	1.17 ～ 1.21	1.8

※永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫県埋蔵銭調査会1994年「８．古銭の計測」（９～10頁）を参考に作成した。

第5章　ま　と　め

ここでは、発見された五輪塔の概要とその数量一覧(第８表) 及び、周辺に点在する五輪塔群の数量(第９～11表) を掲載して結びとしたい。

工事立会調査、試掘調査、追加調査で発見された五輪塔は総数71個に及ぶ。内訳は空風輪17個、火輪21個、水輪13個、地輪18個、不明２個であり、分類すると(第８表参照)、少なくとも21基以上の五輪塔が存在していたようだ。五輪塔の石材には凝灰岩製と砂岩製のものがあり、砂岩はいわゆる「来待石」と考えられる。これらの石材は、八雲村内の五輪塔群では一般的にみられるものである。その割合は、凝灰岩が76％、砂岩が24％であった。丘陵南斜面の段々畑に集積された寺谷五輪塔群(30個)では凝灰岩87％・砂岩13％、ジャノ廻五輪塔群(100個)では凝灰岩73％・砂岩25％、火事廻五輪塔群(18個)では凝灰岩67％・砂岩33％、平成９年に調査を行った村内東岩坂に位置する谷ノ奥遺跡[註6](64個)では凝灰岩75％・砂岩20％であることを考えると、村内ではごく平均的な割合であるといえる。

第７表には、谷ノ奥遺跡との大きさの比較を掲載した。まず、凝灰岩製の五輪塔を比較すると、寺谷五輪塔群よりも谷ノ奥遺跡から出土した部材の方が僅かではあるが大きく作られている。注目されるのが火輪の重量である。幅や高さは谷ノ奥遺跡の方が大きいが、重量では寺谷五輪塔群から出土したものの方が重い。これは谷ノ奥遺跡から出土した火輪の降棟部分がより多く削られているためであり、相対的に寺谷五輪塔群から出土した火輪は腫れぼったく感じる。砂岩製の五輪塔については数が少ないため正確なデータとはいえないが、空風輪では寺谷五輪塔群から出土したものの方が大きい。サイズの違いについては、時期や地域差ではなく、石塔を建立した人の地位の差として理解されている[註7]。個々の石材を比べれば、大きさが倍ほど違う部材もあるが、平均値に限ってみれば殆ど差はないといえる。今回は、谷ノ奥遺跡との比較しか行っていないため、他の遺跡との比較など今後の検討課題としておきたい。

五輪塔の時期についても触れておく。今回の調査では、洪武通寶(第16図21)以外に五輪塔に伴う遺物が出土しておらず、遺物から五輪塔の時期を特定することはできなかった。このため、空風輪と火輪の特徴から時期を考えてみたい。空風輪は、凝灰岩では簡略化されてはいるが、空輪頂部は宝珠に近い形となっている。一方、来待石では、空輪と風輪の境界が溝で区画されるだけで空輪頂部は円筒型に仕上げられている。火輪は、凝灰岩のものは軒の上線と下線が平行して反り返るものと、軒下が直線的で、軒の上の線の隅だけが反り返るものがある。砂岩製のものは、軒下が直線的で、軒の上の線の隅だけが反り返るものとなっている。砂岩に限ってみれば、非常に簡略化されたものだけが遺跡内に持ち込まれている。このような特徴は谷ノ奥遺跡から出土した五輪塔群と良く似ており、寺谷五輪塔群も戦国時代後半から江戸時代始めにかけてのものと考えられる。但し、五輪塔の調整、仕上げについては、谷ノ奥遺跡の五輪塔よりも大雑把な作りという印象を受けた。例えば、空風輪については左右不対象なものが多く、火輪については先述したように大きさの割りに重量がある。水輪については、平面が歪な円形のものが多く、天地の区別をつけがたいものもあった。地輪については底部の加工が雑であり、平らな場所に置くと安定の悪いものや上面が傾斜してしまうものが多い。特に、第25図75などは上面の傾斜がきつく、実際に水輪、火輪、空風輪を積み上げると非常に安定が悪い。斜面に置くための工夫と考えることもできるが、外から見えない底面

は仕上げを行っていなかったためであろう。これらは、より簡略化された新しい時代の特徴として捉えることができるかもしれない。

第７表　寺谷五輪塔群と谷ノ奥遺跡出土五輪塔の大きさの比較一覧表

単位（cm）

遺跡名	材　質	空風輪					
		最大長の平均	最大長の分布	枘を除く長さの平均	枘を除く長さの分布	重量の平均(kg)	重量の分布(kg)
寺谷五輪塔群	凝灰岩	24.3 〈12個〉	20.0～27.1	20.5 〈12個〉	17.0～22.4	5.76 kg 〈12個〉	4.75～7.25kg
	砂岩	24.4 〈4個〉	22.5～27.2	21.4 〈4個〉	19.3～24.0	6.39 kg 〈4個〉	4.4～8.5 kg
谷ノ奥遺跡	凝灰岩	26.1 〈12個〉	22.9～29.9	21.5 〈12個〉	19.0～24.1	6.25 kg 〈12個〉	4.49～8.06kg
	砂岩	21.8 〈3個〉	21.1～22.9	19.5 〈3個〉	18.8～20.7	5.27 kg 〈3個〉	4.59～5.85kg

遺跡名	材　質	火　輪					
		軒幅の平均	軒幅の分布	高さ平均	高さの分布	重量の平均(kg)	重量の分布(kg)
寺谷五輪塔群	凝灰岩	24.2 〈13個〉	21.8～26.7	13.8 〈13個〉	9.6～15.4	12.06 kg 〈10個〉	9.3～16.9kg
	砂岩	25.8 〈6個〉	23.0～28.6	11.6 〈6個〉	9.0～14.5	10.75 kg 〈4個〉	6.75～14.2kg
谷ノ奥遺跡	凝灰岩	25.3 〈14個〉	21.8～31.0	14.8 〈14個〉	11.1～18.1	11.9 kg 〈13個〉	7.48～20.73kg
	砂岩	26.0 〈3個〉	24.6～27.4	10.3 〈3個〉	10.0～10.6	8.9 kg 〈1個〉	8.9kg

遺跡名	材　質	水　輪					
		最大径の平均	最大径の分布	高さの平均	高さの分布	重量の平均(kg)	重量の分布(kg)
寺谷五輪塔群	凝灰岩	23.9 〈8個〉	19.7～26.4	13.9 〈8個〉	10.9～16.0	9.96 kg 〈6個〉	8.7～12.5kg
	砂岩	22.8 〈5個〉	21.3～24.4	14.0 〈5個〉	11.7～16.4	8.0 kg 〈5個〉	5.65～10.7kg
谷ノ奥遺跡	凝灰岩	25.0 〈8個〉	21.7～29.2	14.6 〈8個〉	10.2～18.9	10.54 kg 〈8個〉	6.28～17.55kg
	砂岩	21.6 〈2個〉	19.5～23.6	15.6 〈2個〉	14.1～17.0	10.72 kg 〈1個〉	10.72kg

遺跡名	材　質	地　輪					
		上面幅の平均	上面幅の分布	高さの平均	高さの分布	重量の平均(kg)	重量の分布(kg)
寺谷五輪塔群	凝灰岩	23.7 〈12個〉	21.8～26.0	17.1 〈12個〉	15.2～18.6	19.30 kg 〈11個〉	15.1～25.1kg
	砂岩	23.5 〈5個〉	23.0～25.2	16.7 〈5個〉	15.7～17.7	13.74 kg 〈5個〉	11.5～15.35kg
谷ノ奥遺跡	凝灰岩	23.8 〈8個〉	21.0～26.5	18.4 〈8個〉	14.9～21.4	19.15 kg 〈8個〉	13.42～23.22kg
	砂岩	23.1 〈5個〉	21.7～27.0	18.5 〈5個〉	14.9～26.5	14.02 kg 〈2個〉	12.79～15.25kg

※各項目内の数値については、計測可能なものだけを抽出した。例えば、欠損が大きなものについては、幅や高さの集計は行ったが、重量については計算に入れていない。
※〈　〉内の個数は抽出した個体数を示す。

第８表　寺谷五輪塔群（今回の調査地）五輪塔数量表

	凝灰岩	砂岩	石材不明	計
空　風　輪	13	4		17
火　　輪	16	5		21
水　　輪	8	5		13
地　　輪	15	3		18
分類不能の破片	2			2
数　量　計	54	17		71
合　　計	16 以上	5 以上		21 以上

第９表　寺谷五輪塔群（丘陵南斜面の段々畑）五輪塔数量表

	凝灰岩	砂岩	石材不明	計
空　風　輪	8	2		10
火　　輪	8	1		9
水　　輪	5			5
地　　輪	4	1		5
分類不能の破片	1			1
数　量　計	26	4		30
合　　計	8 以上	2 以上		10 以上

第10表　ジャノ廻五輪塔群五輪塔数量表

	凝灰岩	砂岩	石材不明	計
空　風　輪	19	5		24
火　　輪	20	5		25
水　　輪	10	5	1	16
地　　輪	9	3	1	13
分類不能の破片	15	7		22
数　量　計	73	25	2	100
合　　計	20 以上	5 以上		25 以上

第11表　火事廻五輪塔群五輪塔数量表

	凝灰岩	砂岩	石材不明	計
空　風　輪	2	1		3
火　　輪	6			6
水　　輪	2	1		3
地　　輪	1	2		3
分類不能の破片	1	2		3
数　量　計	12	6		18
合　　計	6 以上	2 以上		8 以上

[註]

註１　有限会社　西村松寿堂ホームページ「茶釜蓋名称」 http://www.web-douguya.com/　（Ｐ８）

註２　・ＪＴ日本たばこ産業株式会社ホームページ
http://www.jti.co.jp/JTI/tobacco/Wonderland/menu.html
・たばこと塩の博物館ホームページ「たばこの歴史と文化」
http://www.jti.co.jp/Culture/museum/WelcomeJ.html　（Ｐ８）

註３　お地蔵様の水受けとして地輪を利用している事例がある。（Ｐ13）

註４　永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫県埋蔵銭調査会 1994 年「８．古銭の計測」（９～10 頁）を参考にしている。（Ｐ 17）

註５　中村唯史氏のご教示による。（Ｐ 17）

註６　『谷ノ奥遺跡』「八雲村文化財調査報告 20」八雲村教育委員会　2002 年３月（Ｐ 31）

註７　樋口英行『白粉石・来待石の宝篋印塔、五輪塔』「宍道町ふるさと文庫 19」
宍道町蒐古館　2004 年３月 31 日（Ｐ 31）

[参考文献]

・『八雲村誌』八雲村　平成10(1998)年12月
・『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ』(出雲・隠岐編)島根県教育委員会　平成15(2003)年３月
・『島根県中近世城館跡分布調査報告書第２集』「出雲・隠岐の城館跡」島根県教育委員会
平成10(1998)年３月
・石倉忠友「秋吉五輪塔群」『かたりべ第１号』八雲村教育委員会・八雲村歴史クラブ　昭和58 (1983)年３月
・島根県古代文化センター調査研究報告書15『出雲国風土記註論』～総記・意宇郡条～
島根県古代文化センター　2003年３月
・石倉靖夫「岩坂銀山」『ふるさと百話』八雲村公民館・八雲村文化財保護協会　昭和48(1973)年３月
・『宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・粧田山遺跡・大村遺跡ほか』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113」
岡山県教育委員会　1996年３月
・『県道安来布部線改良工事に伴う清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』安来市教育委員会　1998年３月
・『出土銭貨　第15号』出土銭貨研究会　2001年５月
・今岡稔「山陰の石塔二三について－７－」『島根考古学会誌　第15集』　1998年８月　島根考古学会

第6章　自然科学的分析

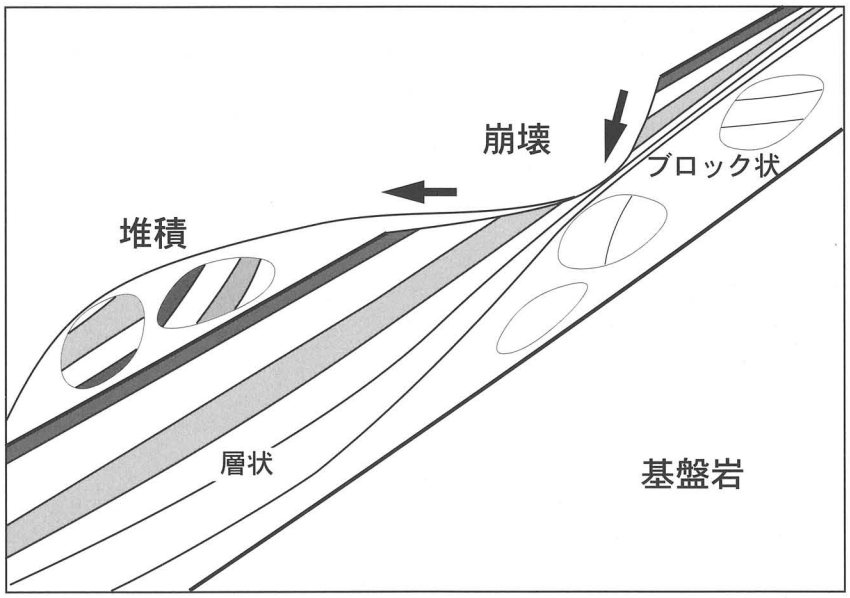
島根県立三瓶自然館サヒメル学芸員
中村　唯史

包含層の状況

寺谷五輪塔群は、意宇川の支流、桑並川に面した谷斜面にあり、付近は勾配40度前後の急傾斜地である。当地の基盤岩は後期白亜紀の「八雲火山岩類」に属する流紋岩で、今回の治山事業に伴って実施されたボーリングによると、地表から深さ1.8～2.2mまでは風化土砂が堆積した崩土(崖錐堆積物)で、その下位に亀裂が多い流紋岩が分布している。

五輪塔の出土状況をみると、ばらばらの状態になったその部材は、限られた範囲に集中して、崩土から出土している。この崩土は、斜面上方から落下してきた崩壊土砂が堆積したもので、粘土化が進んだ土砂と硬質の流紋岩礫が混在している。トレンチ断面で観察するとブロック状の部位と層状の部位が認められる。ブロック状の部位は土砂が崩壊する前の形状をある程度残した塊のままで堆積したもので、たとえば、有機質を含んだ旧表土が、変形しながらも塊状に取り込また状態を見ることができる。これは、斜面表層の崩壊が発生し、その土砂が一塊となって下方に堆積した状況を示している。層状の部位は礫の量やその大きさによって地層区分ができるもので、崩壊した土砂がばらばらの状態で落下して堆積したものである。その様子を模式的に示すと第26図のようになる。次に五輪塔の出土状態について検討する。

五輪塔は斜面のある程度の広がりを持ち、適度の間隔を置いて設置されていたと思われる。しかし、本遺跡の範囲は急傾斜であるがその地形面は平板であることから、斜面の各所に設置されていた五輪塔が崩壊によって下方に堆積した場合、今回のように一部からまとまって出土するということは不自然である。出土地点が斜面全体から物が集まる谷の形状ならばこのような出土状況もあり得るが、そうではない。五輪塔が出土地点の上方にのみ設置されていたという可能性もあるが、人為的に集積されたと考える方が無理がないと思われる。



第26図　堆積層の概念図

五輪塔の石材

五輪塔に用いられている石材には砂岩と白色～灰色の凝灰岩がある。砂岩はやや粗粒な粒子からなり、均質な岩相と火山岩片を多く含む特徴から宍道町で産出する「来待石」とみられる。凝灰岩は石英と角閃石を多く含むデイサイト（石英安山岩）質である。石英粒は粗粒で、直径３～４㎜のものも含まれる。五輪塔の数量では凝灰岩製のものが多く、その産地が近隣にあると思われる。

当地付近には、デイサイト～流紋岩質の火山岩および凝灰岩の地層として、後期白亜紀の八雲火山岩類、中新世の波多層、久利層がある。これらの主な露頭および桑並川とその合流点付近の意宇川の河床礫について観察したが、岩質・岩相が一致する凝灰岩は認められず、産地の特定には至らなかった。今後、周辺の石造物についての資料等が集積される過程で、この石材の産地が特定されることを期待したい。

図　　版

図版１

調査地遠景（南東より）

Ｔ１トレンチ全景（北東より）

図版２

Ｔ２トレンチ全景（北東より）

Ｔ３トレンチ全景（北東より）

Ｔ４トレンチ全景（南西より）

近代墓の周辺に集積された五輪塔群近景（東より）

工事中に不時発見された五輪塔群近景（南より）

図版 4

不時発見された五輪塔群遠景（スタッフの傾斜が旧表土面）

追加調査地近景（南南東より）

追加調査地土層堆積状況（北西より）

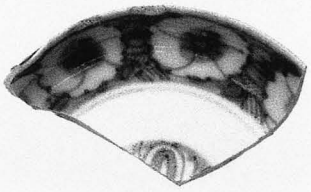
追加調査終了後近景（南より）

図版 6

調査地境から顔を出した五輪塔と銭貨（北西より）

追加調査時の発掘作業風景

発掘作業参加者

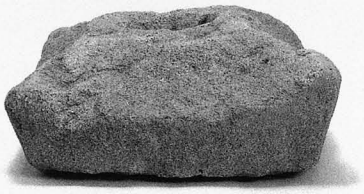

3-1

3-2

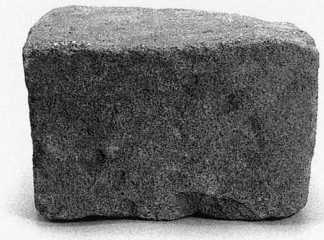
4-3上より

4-4

4-3

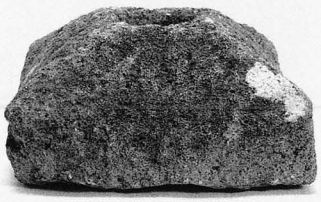

5-5

7-6

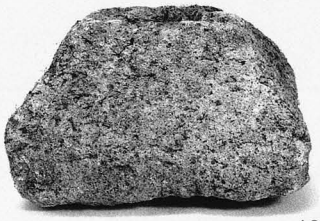

8-7

12-8

12-9


12-10

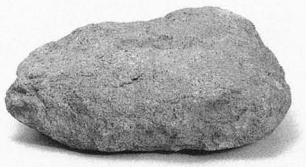
13-11

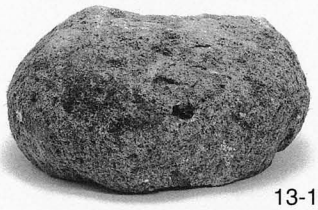

13-12

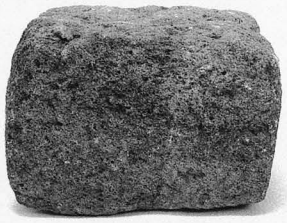
13-13

図版 8

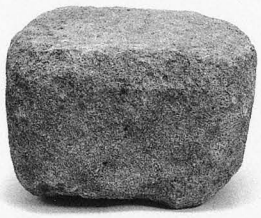
13-14

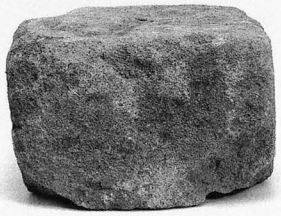

13-15


13-16


14-17

14-17の裏側


14-18


14-19

14-20

16-21

17-22

17-23

17-24

17-25

17-26

17-27

17-28

17-29

17-30

18-31

18-32

18-33

18-34

18-35

18-36

18-37

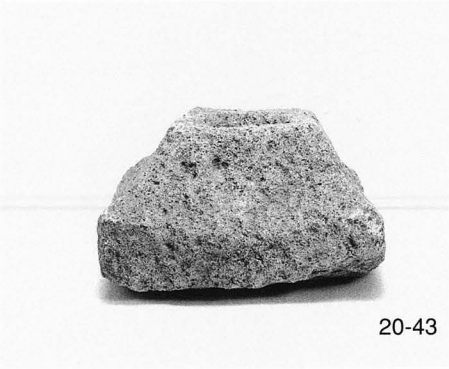
19-38

19-39

19-40

19-41

19-42


20-43

20-44

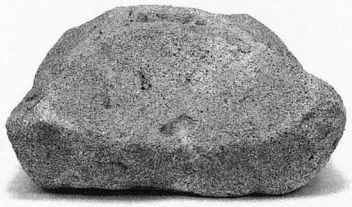
20-45

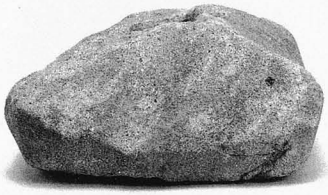
20-46

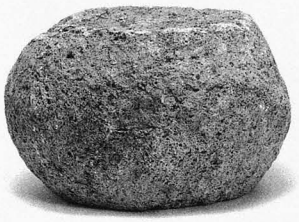
図版10

20-47

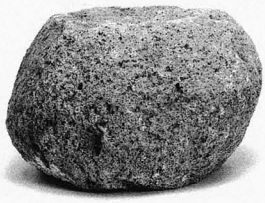
20-48

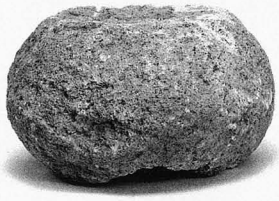

21-49

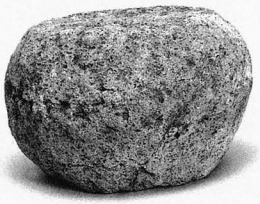

21-50

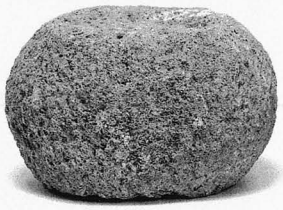

21-51

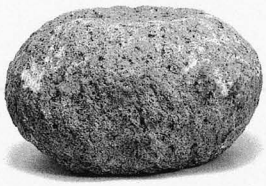
21-52

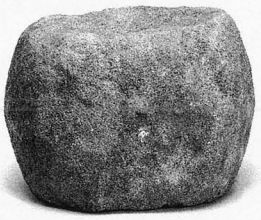

21-53

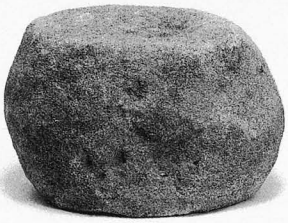

22-54


22-55

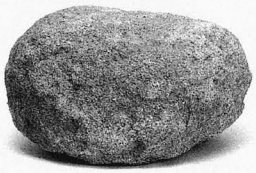

22-56


22-57


22-58


22-59

23-60


23-61

23-62

23-63

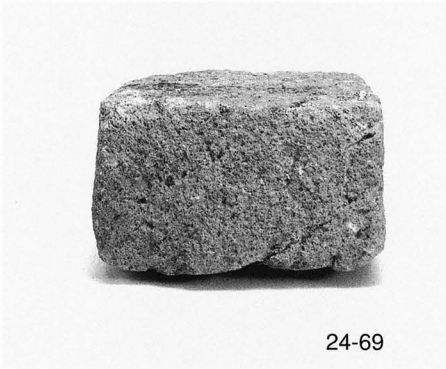
23-64

23-65

24-66

24-67

24-68


24-69

24-70

25-71

25-72

25-73

25-74

25-75

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらたにごりんとうぐん
書名	寺谷五輪塔群
副書名	復旧治山事業（秋家）予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	八雲村文化財調査報告 24
編集者名	川上　昭一
編集機関	八雲村教育委員会
所在地	〒690－2103　島根県八束郡八雲村大字西岩坂 316 番地　TEL（0852）54-2478
発行年月日	平成 17（2005）年 3 月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（m^2）
		市町村	遺跡				
寺谷五輪塔群	島根県 八束郡 八雲村 大字西岩坂	32305	F93	35度22分 8秒	133度 6 分 26秒	平成16年 5 月11日～ 8 月19日	28.5

調査原因	復旧治山事業（秋家）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺谷五輪塔群	古墓	中・近世	無し	五輪塔・銭貨・陶磁器・鉄器	

寺 谷 五 輪 塔 群

平成 17 (2005) 年 3 月

発行　八雲村教育委員会
　　島根県八束郡八雲村大字西岩坂316番地

印刷　株式会社　島根県農協印刷
　　島根県松江市浜乃木二丁目10番52号